

長谷川端蔵 『源氏物語』 岡本主水筆 「若紫」

石井了俱筆 「未摘花」

左馬助筆 「花宴」

長谷川

端（文責）

駒田貴子
村井俊司

解題

一、書誌

ここに翻刻するのは、長谷川端蔵『源氏物語』五十四帖揃、付『源氏物語筆者目録』『源氏物語秘訣』各一冊の中の岡本主水筆「若紫」、石井了俱筆「未摘花」、左馬助筆「花宴」である。

「若紫」は、綴葉装、縦二三・六糎、横十八糎。表紙は吉祥文の布表紙、見返は本文共紙、料紙は鳥の子である。題簽は、中央上部に金銀泥にて、草木の下絵を描き、「わか紫」と墨書きする。全丁数は五十五丁、墨付五十三丁、遊紙前後各二丁。内題はなく、一面十行、和歌は改行して二字下げで記し、そのまま本文を続けている。字数は三丁二十四字、字高は十九糎。最終丁の末に「一校了」と記す。奥書、識語はない。

「未摘花」は、綴葉装、縦二三・六糎、横十八糎。表紙は吉祥文の布表紙、見返は本文共紙、料紙は鳥の子である。題簽は、中央上部に金銀泥にて、未摘花を模した草木を描き、花卉は紅の彩色を施し、「未つむはな」と墨書きする。全丁数は三十六丁、墨付三十四丁、遊紙前後各二丁。内題はなく、一面十行、和歌は改行して二字下げで記し、そのまま本文を続けている。字数は四丁二十五字、字高は十九糎。奥書、識語はない。

「花宴」は、綴葉装、縦二三・六糎、横十八糎。表紙は吉祥文の布表紙、見返は本文共紙、料紙は鳥の子である。題簽は、中央上部に金銀泥にて、花を付けた木々を描き、花は紅の彩色を施し、「花のえん」と墨書きする。全丁数は十四丁、墨付十二丁、遊紙前後各二丁。内題はなく、一面十行、和歌は改行して二字下げで記し、

そのまま本文を続けている。字数は二丁二十四字、字高は十九糎。奥書、識語はない。

なお、この『源氏物語』五十四帖揃の昌琢筆「桐壺」²、玄陳筆「帚木」³、玄的筆「空蟬」⁴、岡本主水筆「夕顔」⁵、西山宗因筆「紅葉賀」⁶、「宿木」⁷は、既に解題を付し翻刻した。

二、石井了俱

「末摘花」の書写者石井了俱は、『石井三家系図』⁸によると、了派を祖とする連歌師の家の人である。この『系図』の該当部分を掲げれば、

了派——了英——了玄——了俱 寛永五年六月十三日卒

日遠上人 寛永十九年三月五日遷化 七十一歳 於身延山号心性院

了心 号閑林庵 延宝六年八月十六日卒 八十三歳 慶安元年之比ヨリ伊達家第十八世右近衛

権少将陸奥守忠宗君奉仕進退判金五枚扶持十口分賜之御相手御相伴引続綱宗君奉仕但七

種御連歌八慶安三年正月ヨリ御発句作代奉京都ヨリ隔年仙台工下り勤ム家記焼失被召出

年月不詳

と記されている。また、『顯伝明名録』¹⁰には、

了俱 連歌師 石井氏 昌叱時代

了心 同 了俱子 退耕行勇弟子

という記載もある。この二つの史料から、了俱の父は了玄で、弟に日遠上人があり、子供に了心がいたと知られる。没年については、『系図』に「寛永五年六月十三日卒」と記されるが、享年を欠くため生年は不明である。以下、『系図』でわかる親族の生没年と、『連歌総目録』^①にある了俱が出席した連歌会の最初と最後の年月日、そして、里村家の人達の生没年も加え、その生涯を年譜にすると次のようになる。

年号

記事

元亀 三年（一五七二） 弟、日遠上人出生。

天正 四年（一五七六） 父、了玄没。

六年（一五七八） 二月二十八日、連歌会（最初）。

十九年（一五九一） 玄陳出生。

文禄 二年（一五九三） 玄的出生。

慶長 元年（一五九六） 子息、了心出生。

七年（一六〇二） 紹巴没。

八年（一六〇三） 昌叱没。

十二年（一六〇七） 玄仍没。

寛永 三年（一六二六） 四月十二日、紹巴二十五回忌の連歌会（最後）。

五年（一六二八） 六月十三日没。

この年譜から、了俱の年齢を推察すれば、子息の了心の生年が玄陳、玄的に近いため、二人の父、玄仍と同世代といえる。それは、紹巴、昌叱からすれば子供の世代に当たる。

その了俱について『仙台人名大辞書』¹²は、
連歌師、慶長年代の人、里村昌叱の門、其の子了心、其子了牧相統で仙台藩の御連歌師なり。
と記し、

『宮城県史』¹³が、

石井了具は慶長時代、里村昌叱の門人で、連歌師として名が知られており、政宗の殊遇を得、その子了心以後藩に召抱えられた。

と解説する。ここにある「里村昌叱の門」「里村昌叱の門人」という昌叱との師弟関係は、年齢的に理解できる。そして、仙台藩との関係も、了俱や連歌の家としての石井家を考える上で、重要な点である。

伊達家お抱えの連歌師としては、猪苗代家が既に出仕しており、了俱が活躍した頃には、猪苗代家の兼如、兼与父子が伊達政宗に召し抱えられていた。

兼与といふともの、爰にをくりきて、

われにをくる歌

兼与

九重の春に心をとゞめぬはみちのく山の花いかならん

返し

九重の春の名残はいかはかり身にまかせぬはつき世なりけり

元和元年（一六一五）三月、京都から江戸に向かう政宗を、兼与が近江の草津まで送った時の贈答歌である。

詞書の中に「兼与といふとも」とあり、政宗に近侍していた様子がわかり、この兼与が寛永九年（一六三二）十二月二十三日に四十九歳で亡くなるまでは、石井家、了俱が介在する余地は少なかったといえる。しかし、兼与

が子息、後継者に恵まれなかったという事情もあり、政宗の跡を継いだ二代藩主伊達忠宗が、了俱の子の了心を召し抱えたのである。その状況について、綿坂豊昭氏は、

猪苗代家が七種連歌の運営事務等を支障なく行うには「人」に恵まれなかったにもかかわらず、猪苗代家はそのまま召し抱えたとうえで、石井了心を新たに召し抱え、七種連歌の運営が少しでも順調であるように取り計らっている。

と記す。先に掲げた『系図』の了心の記載にも、この伊達家への出仕が書かれていた。

このように、実質は了心の代になり、仙台藩に召し抱えられのであるが、その背景には、父、了俱の連歌活動があり、その基盤を了心が引き継いだ結果であるともいえる。つまり、了俱は了心の父という関係で、幕末まで長く伊達家のお抱え連歌師を勤める石井家の直接の祖と位置づけられる。

次に、その了俱の連歌活動を見てみたい。『連歌総目録』によると、了俱が出座した連歌会は百七十五ある。この百七十五の連歌会に於ける、この『源氏物語』揃の書写者との同座の数を見ると、次のようになる。

| 書写 | 昌琢 | 昌俔 | 宗順 | 玄陳 | 玄的 | 玄仲 | 能舜 | 能円 | 行生 | 宗因 | 能通 | 宗具 | 伊益 |
|-----|-----|-----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 同座数 | 154 | 108 | 94 | 95 | 76 | 76 | 19 | 16 | 6 | 6 | 3 | 3 | 1 |

一見して圧倒的に昌琢との同座が多いとわかる。それは、昌琢が南北里村家の柱として活躍していた時期となるためだといえる。昌琢に次いでは、昌俔、宗順、玄陳、玄的、玄仲の順で、玄仲が七十六回となり、それに続く能舜の十九回とは開きがある。

宗順を除けば昌俔、玄陳、玄的、玄仲の四人は里村一族であり、了俱の連歌活動は、昌琢を中心とした里村家に関係する範疇でなされている。それは、昌叱を師とする了俱であれば、当然の帰結といえる。

了俱出座の連歌会で、里村家に特に関係の深い連歌会として、次の四つを掲げておきたい。

元和五年（一六一九）四月二十一日 懐旧 玄仍十三回忌

発句 うへし世や思ひの露のふかみ草

昌琢十三・玄陳八・玄仲十一・昌倪十・玄的八・慶純九・能札十・宗順八・了俱七・能舜八・昌俊七・昌
佐一

元和五年（一六一九）七月二十四日 懐旧 昌叱十七回忌

発句 昔にやけふさえかへる袖の露

昌琢十一・昌倪九・玄仲十・禅昌八・玄陳八・慶純八・玄的七・能札八・英知七・宗順六・了俱六・以省
六・昌以五・小珍一

元和九年（一六二三）四月二十一日 懐旧 玄仍十七回忌

発句 年経ても更に歎の若葉かな

昌琢十二・玄陳九・玄仲十一・昌倪十・玄的八・仙巖九・慶純九・宗順八・了俱八・宗閑七・能円八・昌
佐一

寛永三年（一六二六）四月十二日 懐旧 紹巴廿五回忌

発句 花やあはれ無かこと葉の名取草

| 三年（一六二六） | | | |
|----------|---------|----|----|
| | 一月 | 二月 | 三月 |
| | 一月 三日 | | |
| | 一月 二十一日 | | |
| | 四月 十二日 | | |
| 12 | | | |
| 8 | | | |
| 10 | | | |
| 7 | | | |
| 11 | | | |
| 1 | | | |
| 7 | | | |
| 2 | | | |
| 2 | | | |
| 1 | | | |

『連歌総目録』によると、年月日が明白な了俱出座の連歌会は、天正六年（一五七八）二月二十八日から、寛永三年（一六二六）四月十二日、紹巴二十五回忌の連歌会までであり、その期間は四十九年に及ぶ。この表に見られる同座の顔ぶれは、先に掲げた了俱出座の全ての連歌会を示した表と同じく、昌琢を中心とした里村一族との同座が多く、その傾向は晩年まで変わらなかったとわかる。

この里村家との親密な関係が、了俱のここに翻刻した「未摘花」、そしてもう一冊「常夏」を書写した理由であるといえる。この『源氏物語』揃は一人一巻の書写が多い中で、複数の巻の書写者は、里村一族や里村一門に限られた人物であった。了俱が二冊の書写を担当したのは、正しく連歌会でわかる里村家との親密な関係によるのである。

また、了俱が『源氏物語』で六番目にあたる「未摘花」を担当したのは、「桐壺」を昌琢、「帚木」を玄陳、「空蟬」を玄的と、里村一族の人々を長幼の順に割り振った後、書写の専門家である「筆功」の「夕顔」「若紫」を挟んで、一門の長老格にあたる了俱に割り当てられたためだと考えられる。

了俱は、連歌師としての石井家を、激動の戦国期から江戸初期まで存続させ、子の了心が伊達家の連歌師に抜擢される基盤を築き、昌叱の門人として、里村家の人々と共に連歌活動を展開していた。そして、この『源氏物

語」揃に於ては、二巻の書写を担当する当時の連歌界では、看過できない連歌師の一人だったといえる。

三、「筆功」二人 岡本主水と左馬助の書写

この『源氏物語』揃の書写者で「筆功」は、岡本主水と左馬助の二人である。主水の伝記については、「夕顔」を翻刻¹⁶した際に触れたので省略するが、主水の書写巻は二十一巻と、群を抜いて多い。その中には「若菜」の下、「総角」といった長大な巻も含まれ、文字通り「筆功」という、書写の専門家として、この『源氏物語』揃の完成に大きな原動力となっている。

それに対して、もう一人の左馬助は、分量としても長くない「花宴」一巻のみ担当であり、主水とは対照的に、この『源氏物語』揃の書写者として、単に名を連ねたのみといえる。そして、その出自は未詳である。

今、二人の「筆功」が書写した「若紫」「末摘花」を加えて、この『源氏物語』揃の翻刻は、巻頭「桐壺」から「花宴」までを刊行できた。その翻刻に当たっては、ミセケチ、補入、傍書、合点、朱点も本文に付した。

そこで以下、このミセケチ、補入等に着目して、「桐壺」から「花宴」までの巻に、これも翻刻をすでに終えた「宿木」を加えて、その数を調べたのが次の表である。

| 巻 | 書写者 | 補入 | 傍書 |
|-----|------|----|----|
| 桐壺 | 昌琢 | 7 | 0 |
| 帚木 | 玄陳 | 0 | 2 |
| 空蟬 | 玄的 | 0 | 0 |
| 夕顔 | 岡本主水 | 48 | 2 |
| 若紫 | 岡本主水 | 49 | 10 |
| 末摘花 | 了俱 | 0 | 1 |
| 紅葉賀 | 宗因 | 29 | 4 |
| 花宴 | 左馬助 | 3 | 1 |
| 宿木 | 宗因 | 19 | 12 |

| 合計 | 朱点 | 合点 |
|-----|-----|----|
| 57 | 47 | 1 |
| 2 | 0 | 0 |
| 1 | 0 | 0 |
| 253 | 113 | 14 |
| 293 | 150 | 14 |
| 3 | 0 | 0 |
| 116 | 28 | 7 |
| 23 | 2 | 10 |
| 53 | 0 | 0 |

総計の項目を概観すると、主水の書写した巻にその数が多いとわかる。その書写にかかる「夕顔」の最終丁の末には「一校了又校了」とあり、同じく主水書写の「若紫」の最終丁にも「一校了」という書き入れがある。この書き入れを念頭に、ミセケチ、補入等の多さを見れば、主水が書写した巻は校正がなされ、その結果ミセケチ、補入等が多いと考えられる。

朱点の項目を見れば、これも主水の書写巻の数が多く、昌琢、宗因の「紅葉賀」そして左馬助の担当巻には付されているが、それ以外の巻には全くないという特徴がある。特に宗因によって書写された二つの巻、「紅葉賀」は二十八あるのに対して、分量的にも遙かに多い「宿木」はなしというのは、好対照となっている。

表の朱点について述べたが、それ以外のミセケチ、補入、傍書など全ての項目も含め、その理由を考えれば、親本通り書写したため、書写者によって朱点等を入れたり省略したりした等、様々な可能性が推察される。結論は、やはり、すべての巻の調査の後、または、更に多くの巻の傾向を把握した後にするとして、ここでは、「筆功」として多くの巻を担当している岡本主水の書写した二巻には、校正をしたという記載があり、ミセケチ等が多いという事実を、指摘しておきたい。

そして、この校正がなされているという記載や、主水が書写した「若紫」にある同じ字を書き改め、ミセケチとされている、

なにかし寺といふ所にかしこきをこなひ人（「若紫」 1丁才・4行目）

まのかみのこのくら人よりことしかちふりえたる（「若紫」 5丁ウ・1行目）
 という用例から、主水の正確に書写し、その本文を提供したいという書写態度が窺える。

この主水が書写した「若紫」の中には、この『源氏物語』揃の本文系統を考えるのに有効な部分もある。北山で光源氏が紫の上を垣間見する場面にある紫の上の母の年齢である。本書では、

こ姫君は十二にて殿にをくれ給ひしほといみしう物（8丁ウ・7～8行目）

と書かれているように「十二」とするが、『源氏物語大成』本文（大島本）の当該部は「十ばかり」となっている。「十二」となっているのは、榊原本・肖柏本・三条西家本で、「十二」の「二」をミセケチとして「ばかり」とするのが池田本である。里村家は三条西家と近い関係にあったため、三条西家本と一致するのは自然の流れといえる。

そして、本書より時代が下るが、『湖月抄』⁽¹⁸⁾、『首書源氏物語』⁽¹⁹⁾、『絵入源氏物語』⁽²⁰⁾（承応本・無刊記小本）などの江戸期の版本は「十二」となっている。この系統についてもミセケチ、朱点など同様、詳しくは後に考えてみたい。

四、結語

伊達政宗は、文禄三年（一五九四）二月二十九日、豊臣秀吉主催の吉野山での花見の時に、

はなのねかひ

侍従政宗

おなしくはあかぬころにまかせつちらさて花をみるよしもかな

はなをちらさぬかせ

とをかりし花の木すゑも匂ふなり枝にしられぬ風やふくらん

たきのうへのはな

よしの山たきつなかれにはなちれはいせぎにかゝる浪そたちそふ

かみのまへのはな

むかしたれふかきこゝろのねさしにてこの神かきの花をうへけん

はなのいはひ

君がためよし野の山のまきのはのときはに花の色やそはまし

という五首の歌を詠んだ。それは、『芳野花樹会懷紙』(吉野懷紙)として残り、前田利家が、この政宗の歌を誉めたという話は、政宗の和歌について触れるときよく引かれる。

伊達家の年中行事の中には、正月七日の七種連歌があり、政宗も十二歳の時を始めとして、この連歌会には度々句を付けている。また、伊達家の公式記録で政宗の時代を記す『貞山公治家記録』付録には、政宗の歌集が納められ、『御記録抜書』『仙台黄門君詩歌稿』『貞山公集』という政宗の歌を集めた書物もある。また、政宗自身が編纂し、正妻愛姫に贈ったといわれる『伊達の松陰』にも和歌が収載されており、政宗にとって和歌は遠い存在ではなかったとわかる。

和歌以外の政宗の文芸に関する事跡も掲げれば、『宮城県史』には、政宗は宮沢西甫から『源氏物語』の講釈を受けたとあり、実現しなかったが古今伝授を猪苗代兼与から、受けたいとの希望も持っていた。そして、『源氏物語』『枕草子』『新古今集』『徒然草』等を書写し、漢詩も残している。

政宗といえ、いうまでもなく東北の雄として、伊達家の版図を広げ、その繁栄をもたらした優れた戦国大名である。その政宗は、ここに触れたように文芸に対する造詣が深く、更に笛、鼓といった音楽にも通曉し、書人から請われ、当時流行の茶道は千利休に師事し、能楽、香道、絵画などにも関心を持つ、当代一流の文人でもあった。

特にこの『源氏物語』揃の書写された頃は、関ヶ原の戦い、大阪冬の陣も終わり、世は泰平の時代を迎え、伊達家佳例の七種連歌は欠かさず行ない、時々詠んだ政宗の和歌も多く残っており、文人政宗として江戸や仙台で、日々を過ごしていたのである。

その政宗とここに翻刻した「未摘花」の書写者了俱とは、同時代を生きた人物である。そのため、『宮城県史』には、了俱は「政宗の殊遇を得」と記す。そして、上掲の吉野の花見には、徳川家康、前田利家など有力大名、菊亭晴季、中山親綱などの公家に混じり、紹巴や了俱の師昌叱も参会していた。また、この『源氏物語』揃が書写された頃である、寛永三年（一六二六）七月二十四日には、里村南家の重鎮玄仲が政宗の御会に参加している。このように、了俱に近い里村家の人達と、政宗との直接交渉も見られる。

了俱を取り上げる時、その背景には仙台藩、伊達家そして政宗が浮かび上がる。それは、以前、玄的や宗因を考えた時、加藤家の存在が看過できなかったのと同じであり、昌琢を中心とした里村家の場合は、柳営連歌を通して將軍家へと繋がっていたのである。

そして、その媒介は連歌であり武將にとつての連歌は、家臣の結束を固めるため、或いは、戦勝を期して人智の埒外にある力に奉納する等、重要な意味を持っていた。その連歌を司るのは連歌師であり、その実作には、『源氏物語』は必須の教養であったという指摘もある。

この武将、連歌師そして『源氏物語』という組み合わせは、正しくこの『源氏物語』揃の姿ともいえる。『源氏物語』を徳川家ゆかりの大名等の依頼によって、京都の連歌師が中心となって書写したのがこの『源氏物語』揃の形態だからである。

つまり、今回翻刻した「若紫」「末摘花」「花宴」を含む、この『源氏物語』揃の形態は、当時の武家の『源氏物語』の典型が窺えるのであり、また、その書写者を通して、当時の社会、文化の動向と骨格を探知する知的興味の尽きない、華麗な武家の文物と位置づけられるのである。

翻刻凡例

- 一、翻刻に際しては、原本に忠実であることを旨として、仮名遣は原本通りとしたが、異体字・略体字は通行の字体に改めた。
- 一、和歌は改行をし、二字下げとした。
- 一、ミセケチは文字の中央に棒線を付し、訂正文字は右に記した。
- 一、本文の傍書は原本通りとした。
- 一、補入記号がある場合は該当箇所「」を付し、補入文字は右に記した。
- 一、漢字の踊字「〳」は、そのままとした。
- 一、本文の朱点は「・」で示した。
- 一、朱合点は「そのみるめ」（若紫6才・3行目）の如く、傍線で示した。

(わか紫)

わらはやみにわつらひたまひてよろつにまし
なひかちなとまいらせ給へとしるしなくてあ
またゝひおこり給ければある人きた山になん
なにかし寺といふ所にかしこきをこなひ人
侍るこそ夏もよにおこりて人々ましなひ
わつらひしをやかてとゝむるたくひあまた侍り
きしゝこらかしつる時はつたて侍るをとくこそ
こゝろみ給はめなときこゆればめしにつかはし
たるにおひかゝまりてむろのにもまかてすと
申たればいかゝはせんいとしのひてものせむと

の給て御ともむつまじき四五人はかりして
また暁におはす・やゝふかういる所なりけり
三月のつこもりなれば京の花盛はみな
すぎにけり山の桜はまたさかりにていりもて

1才

おはするまゝに霞のたゝすまひもおかしう
見ゆればかゝるありさまならひ給はずとこ
ろせき御身にてめつらしうおほされけり寺
のさまもいと哀なりみねたかくふかき岩の中
にそひしりいりみたりけるのほり給てたれ
ともしらせ給はずいといたうやつれ給へれ

1ウ

としるき御さまなれば・あなかしこや一日めし侍
しにやおはしますらん今はこの世のことをおもひ
たまへねはけむかたのをこなひもすてわす
れて侍をいかてかかうおはしましつらんとお
とろきさはきうち象みつゝ見たてまつる
いとたうときたいとこなりけりさるへき物つ
くりてすかせたてまつるかちなとまいるほど日
たかくさしあかりぬ・すこしたち出つゝ見わたし給
へはたかき所にてこゝかしこ僧坊ともあらはに
見おるさるゝたゝこのつゝらおりのしもおなし

2才

こしはなれとつるはしうしわたしてきよけなる
 やらうなとつゝけてこたぢいとよしあるはなに
 人のすむにかとゝひ給へは御ともなる人はな
 むなにかしのそうつのこのふたとせこもり侍る
 はうに侍るなる・心はつかしき人すむなる所に
 こそあなれや^あ やしうもあまりやつしけるかなと
 きゝもこそすれよなどのたまふきよけなる
 わらはなとあまたいてきてあかたてまつり花
 おりなとするもあらはに見ゆ・かしこに女こそ
 ありけれそうつはよもさやうにはすへ給はしを
 いかなる人ならんとくちくゝいふおもてのそくも
 ありをかしける女こともわかき人わらはへなん
 みゆるといふ・君はおこなひしたまひつゝひたくる
 まゝにいかならんとおほしたるをとかうまぎらは
 させ給ておもほしいれぬなんよく侍るときこゆ
 れはうしろの山にたち出て京のかたを見給ふ
 はるかに霞わたりにてよものこすそこはかとなう

2ウ

けぶりわたれるほとゑにいとよくもにたるかな
 かゝるところにすむ人心におもひ残すことは
 あらしかしとの給へは・これはいとあさく侍り人の^あ
 くになどに侍る海山のありさまなどを御覽せ
 させて侍らはいかに御覧いみ^ままさらせ給はんとふし
 の山なにかしのたけなとかたりきこゆるもあり
 又西^し国のおもしろき浦々磯のつへをいひつゝ
 くるもありてよろつにまぎらはしきこゆちか
 き所にははりまのあかしの浦こそ猶ことに侍
 れなにのいたりふかきくまはなけれどたゝうみ
 のおもてを見わたしたる程なむあやしく
 こと所にすゆほひかなる所に^あ・かのくにの
 さきのかみしほちのむすめかしつきたるいゑい
 といたしかし大臣のゝちにていてたちもすへか
 りける人のよのひか物にてましらひもせず近
 衛の中將を捨て申たまはれりけるつかさなれ

3オ

3ウ

とかのくにの人にすこしあなつられてなにも

いほくにてか又都にも帰らんといひてかしらも

おろし侍りにけるをすこしおくまりたる山

すみもせてさる海つらにいてゐたるひか／＼し

きやうなれとけにかの国のうちにも人のこ

もりぬぬへき所／＼はありながらぶかきさとは

人はなれこゝろすこくわかきさいしのおもひわ

ひぬへきによりかつは心をやれるすまぬに

なむ侍る・さいつこるまかりくたり 侍りしついで

にありさま見給へによりて侍りしかは京

にてこそとこるえぬやうなりけれそこらはる

かにいかめしうしめてつくれるさまさはいへと

国のつかさにてしをきけることなれば残りの

よはひゆたかにぶへき心がまへもになくしたり

けりのちのよのつとめもいとよくしてなか／＼

ほうしまさりしたる人になむ侍りけると

申せは・さてそのむすめはと／＼給ふけしうは

4才

あらずかたち心はせせなと侍るなりたい／＼の国

のつかさと とういことにしてさる心はへみす

なれとさらけにうけひかすわかみのかくいたつらに

しつめるたにあるをこの人ひとりこそあれ

おもふさま となりもしわれにをくれて ころ

さしとけす おもひをきつるすくせたるは海

にいりねとつねにゆいこんしをきて侍るなると

きこゆれば君もおかしとき 給人々かいらうわ

うのきさきになるへきいつきむすめな

り心たかさくるしやとてわらふ・かくいふははり

まのかみのこのくら人よりことしかぶりえたる

なりけりいとすきたる物なればほかの入

道のゆいこんやふりつへき心はあらんかしさて

たすみよるならんといひあへり・いてやさいふとも

ゑ中ひたらんおさなくよりさる所におひい

て／＼ふるめいたるおやにのみしたかひたらむ

は・はゝこそゆへあるへけれよきわかうとわらは
 なとみやこのやむことなき所々よるいにふ
 れてたつねとりてまはゆくこそもてなすなれ
 情なき人になりてゆかはさて心やすくしてし

5ウ

もえをきたらしをやなといふもあり・君なに
 心ありてうみのそこまでぶかうおもひいるらん
 そのみるめ物むつかしうなとのたまひて
 たゝならずおほしたりかやうにてもなへてな
 らすもてひかみたることこのみ給御心なれば御心
 とゝまらんをやと見たてまつる・くれかゝりぬ
 れとおこらせ給はずなりぬるにこそはあめれ
 はやかへらせ給なむとあるをたいとこ御物のけ
 なとくはゝれるさまにおはしましけるをこよ
 ひはなをなをしつかにかちなとまいりて出させ
 給へと申さもある事と皆人申君もかゝる
 たひねもならひ給はねはさすかにおかしくてさら

6オ

は暁にとの給・日もいとなきにつれ／＼なれば
 夕暮のいたう霞たるにまきれてかのこし
 はかきのもとにたち出給人々はかへし給てこ
 れみつばかり御ともにてのそき給へはたゝこの
 にしおもてにしもち仏すへ奉りてをこなふ
 あまなりけりすたれすこしあけて花たて
 まつるめり中のはしらによりあてけうそ

くのうへに経をゝきていとなやましけによみ

6ウ

ゐたるあま君たゝ人とみえず四十よ許にてい
 としろつあてにやせたれとつらつきふくらか
 にまみのほかかみのうつくしけにそかれたるす
 彘も中／＼なかきよりもこよなういまめかし
 き物かなと哀に見給きよけなるおとなふ
 たりはかりさてはわらはへそ出いりあそぶ中
 に十はかりにやあらんとみえてしるききぬやま
 ふきなどのなれたるきてはしりきたる女こ
 あまたみえつる子ともゝるへうもあらずい

みしくおひさきみえてうつくしけなるかたちなり

7才

かみはあぶきをひろけたるやうにゆら／＼としてかほはいとあかくすりなしてたてりなにごとそやわらはへとほらたち給へるかとてもま君の見あげたるにすこしおほえたる所あれば

こなめりと見給ふ・すゝめのをいぬきかにかしつるふせこのうちにこめたりつる物をとてい

とくちおしとおもへりこのぬたるおとなれいの心なしのかゝるわさをしてさいなまるゝこそいと心つきなれいつかたへかまかりぬるいとをかしよう／＼なりつる物をからすなともこそみつくれ

7才

とてたちてゆくかみゆるゝかにいとなくくめやすきなめり少納言のめのとゝそ人いふめるはこの子のうしろみなるへし・あま君いてあなおさなやいぶかひなう物し給かなをのかかくけふあすになりぬるいのちをはなにともおほしたらて

すゝめしたひたまふほとよつみうるこそとつねにきこゆるを心うくとてこちやといへはついでたりつらつきいとらうたけにて肩のわたりうちけふりはけなくかひやりたるひたつきかんさしいみしうつくしねひゆかんさまゆかしき人

8才

かなとめとまり給・さるはかきりなう心をつくしきこゆる人にいとようにたてまつれるかまほらるゝなりけりとおもふにも涙そおつる・あま君かみをかきなてつゝけつる事をもうるさかり給へとをかしの御くしやいとほかなう物したまふこそ哀にうしろめたけれかはかりになれはいとかゝらぬ人もある物をこ姫君は十二にて殿にをくれ給ひしほといみしう物は思しり給へりしかしたゝいまをのれみすて奉らはいかてよにおはせんとすらむとていみしくなくをみ給もすゝろにかなし・おさ

8才

な心ちにもさすかにうちまもりてふしめになり
てつづしたるにこほれかゝりたるかみつや／＼
とめてたうみゆ

おひたゝむありかもしらぬ若草をゝくら
す露そきえんそらなき又あたるおとな
けにとうちなきて

はつくさのおひ行すゑもしらぬまにいかてか
露のきえんとすらむときこゆるほとに僧都

あなたよりきてこなたはあらはにや侍らんけふし

9才

もはしにおはしましけるかなこのかみのひしり
のかたに源氏。中將のわらはやましましなひに
物し給ふけるをたゝ今なんきゝつけ侍るいみ
しつしのひ給ければえしり侍らてこゝに侍り
ながら御とふらひにもまつてざりけるとの給へは・
あないみしやいとあやしきさまを人やみつらん
とてすたれおろしつ・このよにのゝしり給ひかゝる
源氏かゝるついでに見たてまつり給はんや

よをすてたるほうしの心ちにもいみしう

世のつれへわすれよはひのふる人の御ありさま

なりいて御そうそきこえんとてたつをと

すれはかへり給ぬ・哀なる人をみつるかなかゝれ

はこのすきものともはかゝるありきをのみし

てよくさるましき人をもみつくるなりけりた

まさかにたちいつるたにかくおもひのほかなる

ことを見るよとおかしうおほすさてもいとうつ

くしかりつるちこかななに人ならんかの人の御かは

りに明暮のなくさめにもみはやとおもふ心ふ

かうつきぬ・うちふし給へるに僧都の御てしこ

れみつをよひ出さす程なき所なれば君もや

10才

かてきゝ給・よきりおはしましけるよししたゝ今
なむ人申におとろきながらさふらふへきを
なにかしこの寺にこもり侍りとはしるしめし
ながら忍ひさせ給へるをつればしくおもひ給へ

9才

てなんくさの御むしろもこのはうにこそまうけ
侍へけれ^いとほひなき事と申給へり・いぬる十
よ日の程よりわらはやみにわつらひ侍るをたひ
かさなりてたへかたう侍れは人のをしへのまゝ
に俄にたつねいり侍つれとかうやうなる

人のしるしあらはさぬときはしたなかるへきもたゝ

なるよりはいとおしうおもひ給へつゝみてなむ
いたうしのひ侍つる今そなたにもとの給へり・

すなはち僧都まいり給へりほうしなれといと

心はつかしく人からもやむことなくよにおもはれ
たまへる人なればかるくしき御ありさまをは
したなうおほす・かくこもれるほどの御物かた
りなときこえ給ておなし柴のいほりなれと

すこしすゝしき水のなかれも御覽せさせむとせ
ちにきこえ給へはかのまたみぬ人々にことくし
ういひきかせつるをつゝまじうおほせと哀な

10ウ

11オ

りつるありさまもいふかくておはしぬ・けにいと

心ことによしありておなし木草をもうへなし

給へり月もなきころなればやり水にかゝりひと

もしとろるなどにもまいりたり南おもてい

ときよけにしつらひ給へりそらたき物こゝる

にくゝかほり^いて名香のかなどにほひみちたるに

君の御をひかせいとことなればうちの人々も心

つかひすへかめり・僧都よのつねなき御物かたり

のちのよの事なときこえしらせ給わか御つみの

ほとおそろしうあちなき事に心をしめて

11ウ

いけるかきりこれをおもひなやむへきなめりまし

て後世のいみしかるへきおほしつゝけてかうやう

なるすまもせまほしうおほえ給ぶ物から

ひるのおもかけ心にかゝりてこひしければ・こゝ

に物し給ふはたれにかたつねきこえまほしき夢

を見給へしかなけふなんおもひあはせつると

きこえ給へは・うちわらひてうちつけなる御夢

かたりにぞ侍るなるたつねさせ給ても御心
 おとりせさせ給ぬへし 按察注 大納言はよになく
 てひさしくなり侍ぬればえしるしめさし

12才

そのきたのかたなむなにかしかいもうとに侍るか
 の按察かくれてのちよをそむきて侍か此比わ
 つらふ事侍るによりかく京にもまかてねは
 たのもし所にこもりて物し侍る也ときこえ

給・かの大納言の御むすめ物し給ふときゝたまへ
 しはすきゝしき方にはあらてまめやかにき
 こゆるなりとをしあてにの給へは・むすめ
 たゝひとり侍しうせてこの十よ年にやなり
 侍りぬらん故大納言内にたてまつらんなとかし
 こついつき侍しをそのほいのことくも物し侍らて
 すき侍にしかはたゝこのあま君ひとりもてあつ
 かひ侍しほとにいかなる人のしわざにや兵部卿
 の宮なん忍ひてかたらひつき給へりけるを

12才

もとのきたのかたやんことなくなとしてやすか
 らぬ事おほくて明暮物を思ひてなむなく
 なり侍にし・物おもひにやまひつく物とめにち

かく見給へしなと申給ふ・さらはそのこなりけり
 とおほしあはせつみこの御すちにてかの人に
 かよひきこえたるにやといとゝ哀にみまほし
 人のほともあてにをかしう中ゝのさかしら心な

13才

くうちかたらひて心のまゝにをしへおふしたてゝ
 見はやとおほす・いとあはれに物し給ふ事かな
 それはとゝめたまふかた見もなきかとおさ
 なかりつるゆくゑの猶たしかにしらまほしくて
 とひ給へはなくなり侍しほとにこそ侍しかそ
 れも女にてそそれにつけても物おもひのも
 よほしになんよはひのすゑにおもひ給へなけ
 き侍るめるときこえ給・されはよとおほさる
 あやしきことなれとおさなき御つしるみに
 おほすへくきこえ給てんやおもふ心ありて

ゆきかゝつらぶかたも侍りながらよにこゝろしま
ぬにやあらんひとりすみにてのみなむ・またにけ
なきほとゝつねの人におほしなすらへてはし
たなくやなどの給へは・いとちれしかるへきおほせ
ことなるを たむけにいはけなきほどに侍めれば
たはふれにても御覽しかたくやそもゝ女は
人にもてなされておとなにもなりたまふ
物なゝれはくはしくはえとりまうさすかのをおは
にかたらひ侍りてきこえさせむとすくよかに
いひて物こはきさまし給へればわかき御心に
はつかしくてえよくもきこえ給はず・あみた仏物
し給たうにする事侍るころになんそやいまた
つとめ侍らず過してさぶらはむとてのほり給ひ
ぬ・君は心ちもいとなやましきに雨すこしうち
そゝき山かせひやゝかにぶきたるに滝のよとみも
まさりて音たかうきこゆすこしねふたけなる

13
ウ14
オ

経のたえゝすこきこゆるなとすゝるなる人
も所から物哀也ましておほしめくらすことおほ
くてまとるまればすそやといひしかとも夜
もいたうふけにけりうちにも人のぬぬけはひ
しるくていと忍ひたれとすゝのけうそくにひき
ならざるゝをとほのきこえなつかしううちそ
よめくをとなひあてはかなりときゝ給てほ
ともなく近ければとにたてわたしたる屏風
の中をすこしひきあけてあふきをならし給
へは・おほえなき心ちすへかめれときゝしらぬや
うにやとてあさりいつる人あなりすこしし
そきてあやしひかみゝにやとたとるをきゝ給
て・ほとけの御しるへはくらきにいりてもさら
たかふましかなる物をとの給御こゑのいとわ
かうあてなるにうち出んこはつかひもはつかし
けれと・いかなるかたの御しるへにかはおほつかなく

14
ウ15
オ

ときこゆ・けにうちつけなりとおほめきたま
はんもことほりなれと

はつくさのわか葉のうへをみつるよりたひねの
そても露そかはかぬときこえ給てんやとの給・

さらにかうやうの御せうそこうけたまはりわくへ
き人も物し給はぬさまはしろしめしたりけなる
をたれにかはときこゆ・をのつからざるやうありて
きこゆるならんとおもひなし給へかしの給へは・

15
ウ

いりてきこゆあないまめかしこの君やよついたる
ほとにおはするとそおほすらんさるにてはかのわかく
さをいかてきいたまへることそとさまくあやしきに
心もみたれてひさしうなれはなさけなしとて

枕ゆふこよひはかりの露けさをみやまのこけに
くらへさらなむひかたう侍物をときこえ給・かう
やうの人つてなる御せうそこはまたさらにきこ
えしらすならはぬことになんかたしけなくともかゝ
るつめてにまめくしうきこえさすへきことな

むときこえ給へれは・尼君ひかときく給へる

16
才

ならむいとつかしき御けはひに何事をかはいら
へきこえんとの給へははしたなつもこそおほせと
人々きこゆけにわかやかなる人こそうたてもあ
らめまめやかにの給かたしけなしとてあさりよ
り給へり・うちつけにあさはかなりと御覽せら
れぬへきつめてなれと心にはさもおほえ侍ら
ねは仏はをのつからとておとなくしうはつかし
けなるにつままれてとみにもえうち出給は
す・けにおもひたまへよりかたきつてにかく
まての給はせきこえさするもあさくはいかゝとの

16
ウ

給ふ・哀につけたまけるはさまをかのすき給ひ
にけん御かはりにおほしないてんやいふかひなきほ
とのよはひにてむつまじがるへき人にもたちを
くれ侍りにければあやしうきたるやうにて
とし月をこそさね侍れおなしさまにものし給

なるをたくひになさせ給へといときこえまほ

しきをかゝるおり侍かたくてなむおほされん所

をもはゝからすうちいて侍りぬれときこえ給へは・

いとうれしうおもひたまへぬ、き御事ながらもき

こしめしひかめたることなとや侍らんとつゝまし

うなんあやしき身ひとつをたのもし人にする

人なん侍れといとまたいふかひなきほとにて

御覽しゆるさるゝかたも侍かたければえなむつ

けたまはりともめられさりけるとの給・みなおほつ

かなからすうけたまはる物をとこるせうおほしはゝ

からておもひたまへよるさまことなる心の程を

御覽せよときこえ給へといとにけなき事

をさもしらての給とおほして心とけたる御いら

へもなし・僧都おはしぬればよしかうきこえそめ

侍ぬれはいとたのもしうなむとてをしたて

給ひつ・晧かたによになりにければ法花三昧

17才

17才

おこなふたつのせんぼうのこゑ山おろしにつき

てきこえくるいとたつとく滝のをとにひゝきあ

ひたり

ふきまよふみやまおろしに夢覚てなみた

もよほすたきのをとかな 僧都イ無本

さしくみに袖ぬらしける山水にすめるこゝろは

さはきやはするみゝなれ侍りにけりやときこ

え給・明行空はいといたう露て山の鳥とも

そこはかとなくさへつりあひたりなもしら

ぬ木草の花とも色くりにちりましりにしきを

しけるとみゆるにしかのたゝすみありくもめつ

らしく見給になやましさもまきれはてぬ・ひ

しりうこきもえせぬととかうしてこしんまい

らせたまふかれたるこゑのいといたうすきひか

めるも哀にくうつきてたらによみたり・御むかへ

の人々まいりてをこたり給へるよろこひきこ

え内よりも御つかひあり僧都みえぬさまの

18才

御くた物なにくれとたにのそこまでほりいて

いとなみきこえ給・ことしはかりのちかひぶかう侍り

て御をくりにもえまいり侍るまじきこと中く

にもおもひ給へらるへきかなときこえ給ておほみ

きまいり給・山水に心とまり侍りぬれと内よ

りおほつかならせ給へるもかしこければなむ

いまこのはなのおりすくさすまいりこむ

宮人にゆきてかたらん山桜風よりさきに

きてもみるへくと給御もてなしこはつかひさへ

めもあやなるに

うとむけの花まちえたる心ちしてみやま

さくらにめこそうつらねときこえ給へはほゝゑみて

時ありてひとたひひらくなるはかたかなる物をと

の給・ひしり御かはらけたまはりて

おく山のまつのとほそをまれにあけてまた

みぬはなのかほをみるかなとちなきてみたて

18才

まつる・ひしり御まもりにとたてまつる僧都

さうとくたいしのふたらくよりえたまへりけ

るこむかつしのすゝの玉のさうすくしたるやかて

そのくによりいれたるはこのからめいたるをすき

たるをすまたるふくろにいれてこえうのえ

たにつけてこむるりのつほともに御くすりとも

いれてふちさくらなとにつけて所につけたる

御をくり物ともさゝけたてまつり給・きみひしり

よりはしめと経じつるほつしのふせともまうけ

の物ともさまくにとりにつかはしたりければその

わたりの山かつまでさるへき物ともたまひ御す経

なとして出給・うちこそうつ入給てかのきこえ給

しことまねひきこえ給へともかつもたゝいま

はきこえんかたなしもし御心さしあらは今四五年を

すくしてこそはともかうもとの給へはきなんとおな

しさまにのみあるをほいなしとおほす・御せうそ

19才

19才

20才

こ僧都のもとなるちいさきわらはして

夕まくれほのかに花の色をみてけさはかすみ
のたちそわつらふ御返し

まことにや花のあたりはたちつきにかすむる

空のけしきをもみんとよしあるてのいとあて

なるをうちすてかい給へり・御車にたてまつる

ほど大殿よりいつちともなくておはしましに

けることゝ御むかへの人々きみたちなとあまた

まいり給へる頭中將左中弁さらぬきみたちも

したひきこえてかうやうの御ともはつかうまつり

20

ウ

侍らんとおもひたまふるをあさましくをくらさせ給

へることゝうらみきこえていとみしきはなのかけ

にしはしもやすらはすたちかへり侍らんはあかぬわさ

かなとの給・岩かくれのこけのうへになみゑてかは

らけまいるおちくる水のさまなどゆへあるた

きのもとなり・頭中將ぶところなりけるふえ

とり出てぶきすましたり弁のきみあぶきは

かなぶうちならしてとよらのてらのにしなるやと

うたふ人よりはことなる君たちなるを源氏の

きみいたうちなやみて岩によりぬ給

21

オ

へるはたくひなくゆゝしき御ありさまにそなに

事にもめうつるましかりける・れいのひちりきぶ

くすいしんさうのふえもたせたるすきものなと

ありそうつきをみつからもてまいりてこれ

たゝ御てひとつあそはしておなしつは山の鳥を

もおとろかし侍らんとせちにきこえ給へはみたり

心ちいとたへかたき物をときこえ給へとけにくか

らすかきならしてみなたち給ぬ・あかすくちおし

といぶかひなきほしわらへも涙をおとしあへりまし

てうちにはとおいたるあま君たちなとまた

21

ウ

さらにかゝる人の御ありさまをみさりつればこの世

の物ともおほえ給はすときこえあへり・そうつも

哀なにの契にてかゝる御さまなからいとむつかし

きひのものとすゑのよにちまれ給へらむとみる
 にいとなかなしきとてめをしのこひ給・この
 わかきみおさな心ちにめてたき人かなと見給
 て宮の御ありさまよりもまさり給へるかなな
 との給さらはかの人の御こになりておはしませ
 よときゆればうちうなづきていとようあり
 なんとおほしたりひいなあそひにもゑかい給

にも源氏の君とつくり出てきよなるきぬき
 せかしつき給・きみはまつ内にまいる給てひころ
 の御物かたりなときこえ給いといたうおとろへ
 にけりとてゆゝしとおほしめしたりひしりの
 たうとかりけることなとへはせたまふくはしく
 そつし給へはあさりなともなるへきものにこそ
 あなれをこなひのらうはつもりておほやけに
 しろしめされさりけることゝたうとかりの給
 はせけり・大殿まいりあひ給て御むかへにもとおも
 ひ給つれとしのひたる御ありきはいかゝと思

22才

はゝかりてなむのとやかに一二日つちやすみ給
 へとてやかて御をくりつかまつらんと申給へはさ
 しもおほさねとひかされてまかて給わか御
 車にのせたてまつり給ふてみつからひき
 入てたてまつれりもてかしつききこえ給へ
 る御心はへの哀なるをそさすかに心くるし
 くおほしける・殿にもおはしますらんと心つか
 ひし給てひさしく見給はぬほといと玉の
 うてなにかきしつらひよろつをとへのへ給
 へり女君れいのはひかくれてとみにも出給はぬ
 をおとせちにきこえ給てからうしてわたり
 給へりたゝゑにかきたる物のひめきみのや
 うにしすゑられてうちみしるき給ふこともかた
 くうるはしうて物し給へは・おもふこともうちかす
 め山みちの物かたりをもきこえむにいふかひあり
 ておかしうちいらへたたまはこそ哀なら

22才

23才

めよには心もとけすうとくはつかしき物にお
ほしてとしのかさなるにそへて御心のへたて
もまさるをいとくるしくおもはずに時々は世の
つねなる御けしきをみはやたへかたうわつら

ひ侍しをもちかゝるとたにはせ給はぬこそめつ
らしからぬ事なれとなをつらめしうときこえ
給・からうしてとはぬはつらき物にやあらんと
しりめにみをこせ給へるまみいとほつかしけに
けたかううつくしけなる御かたちなり・ま

れくはあさましの御ことやはぬなといふきは
ことにこそ侍なれ心うくもの給ひなすかなよ
とゝもにはしたなき御もてなしをもしおほし
なをるおりもやとゝさまかうさまに心みきこ
ゆるほといとゝおほしうとむなめりかしよしや

いのちたにとてよるのおましに入給ひぬ・女き
みぶともいり給はずきこえわつらひ給てうち

24
オ23
ウ

なけてふし給へるもなま心つきなきにや
あらんねふたけにもてなしてとゝう世をおほし
みたるゝことおほかり・かのわかくさのおひいてんほ
とのなをゆかしきをにけなひほとゝおもへり
しもことはりそかしいひよりかたき事にも
あるかないかにかまへてたゝ心やすくむかへとり
て明暮のなくさめにみん兵部卿の宮はいと
あてになまめい給へれとにほひやかになと

もあらぬをいかてかのひとそうにおほえ給
えんひとつきさきはらなれはにやなとおほ
すゆかりいとむつまじきにいかてかどぶかうお
ほゆ・又の日御文たてまつれ給へりそうつにも
ほのめかしたまふへし・あまうへにはもてはなれ
たりし御けしきのつゝまじさにおもひたま
ふるさまをもえあらはしはて侍らすなりにし
をなん・かはかりきこゆるにてもをしなへたえぬ
心さしのほどを御らんししはいかにうれしう

24
ウ

なとあり中にちいさく引結ひて

おもかけは身をもはなれず山桜心のかき
りとめてこしかと夜のまの風もうしろめたく

なむとあり・御てなとはさる物にてたゞはかなう
をしつゝみ給へるさまもさたすきたる御めと

もにはめもあやにこのましうみゆあなかたはらい
たやいかゝきこえむとおほしわつらぶゆくての
御ことはなをさりにもおもひ給へなされしをふ
りはへさせ給へるにきこえせんかたなくなむ
またなには津をたにはかゝしうつゝ侍らさ
めればかひなくなむさても

嵐吹おのへの桜ちらぬまを心とめけるほどの

はかなさいとゝうしろめたうとあり・僧都の

御返もおなしさまなればくちおしくて三三日あ
りてこれみつをそたてまつれ給少納言のめの
とゝいふ人あへしたつねてくはしうかたらへなと

25才

25ウ

の給しらすさもかゝらぬくまなき御心かなさはかり
いはけなけなりしけはひをまほならねとも
しほとをおもひやるもおかし・わざとかう御文あ
るをそうつもかしこまりきこえ給少納言に
せうそこしてあひたりくはしくおほしの給ふ

26才

さまおほかた御ありさまなとかたることはおほかる
人にてつきゝしうひつゝくれといとわりな
き ほどをいかにおほすにかとゆゝしうなんたれも
たれもおほしける・御文にもいとねんころにかい給
ひて・かの御はなちかきなん猶見給へまほしき
とてれいの中なるにはあさかやまあさくも人
おもはぬになとやまの井のかけはなるらん
御返し

くみそめてくやしときゝし山の井のあさ

きなからやかけをみるへきこれみつもおなしこと
をきこゆこのわつらひたまふことよろしくはこの

26ウ

ころすくして京の殿にわたりたまてなんきこ
 えさすへきとあるを心もとなうおほす・ふち
 つほの宮なやみ給事ありてまかて給へり
 うへのおほつかなまかりなけきこえ給御け
 しきもいとくおしう見たてまつりなからかゝ
 るおりたにと心もあくかれまとひていつくに
 もくまうて給はず内にてもさとにてもゆる
 はつくくとなかめくらくしてくるればわう命婦
 をせめありき給・いかはたはかりけんいとわり
 なくてみたてまつるほどさへうつとはおほえぬ
 そわひしきや宮もあさましかりしをおほし
 いつるたによくもの御物おもひなるをさて
 たにやみなんとぶかうおほしたるにいと心つくて
 いみしき御けしきなる物からなつかしうらつたけ
 にざりとてうちとけす心ぶかうはつかしけなる
 御もてなしなどのなを人にさせ給はぬをなとか
 なのめなることたにうちましま給はざりけん

27才

とつらふさへそおほさるる・なに事をかはきこ
 えつくし給はんくらふの山にやとりもとらま
 ほしけなれとあやしくなるみしか夜にてあさ
 ましう中くなり
 見てもまたあふ夜まれなる夢のうちに
 やかてまきるゝわかみともかなとむせかへり給
 さまもさすかにいみしければ
 よかたりに人やつたへむたくひなくつき
 身をさめぬ夢になしてもおほしみたれたる
 さまもいとことほりにかたしけなし・命婦のき
 みそ御なをしなとはかきあつめてきたる殿
 におはしてなきねにふしくらし給ひつ御文なと
 もれいの御覧しいれぬよしのあれはつねのことな
 からもつらういみしうおほし・ほれて内へもま
 いらて二三日にもりおはずれば又いかなるに
 かと御心うこかせたまふへあめるもおそろしう

27ウ

28才

のみおぼえ給・宮も猶いと心つき身なりけり
とおほしなけくにあやましさもさり給てと
くまいり給へき御つかひしきれとおほしもたゝ
すまことに御心ちれいのやうにもおほしまさぬ
はいかなるにかと人しれすおほすこともあり
ければ心うくいかならんとのおほしみたるあ

つき程はいと おきもあかり給はず・三月にな

り給へはいとしるきほとにて人くみたて

まつりとかむるにあさましき御すくせのほと

心うし人はおもひよらぬ事なればこの月までそ

うせさせ給はさりけることゝおとろき こゆわか御

心ひとつにはしるうおほし分こともありけり

御ゆ殿などにもしたしうつかうまつりて何

事の御けしきをもじるくみたてまつりしれる

御めのとこの弁命婦などそあやしと思へと

かたみにいひあはずへきにあらねどなをのか

28
ウ

れかたかりける御すくせをそ命婦はあさまし
とおもふ・うちには御物のけのまきれにてとみ
にけしきなうおはしましけるやうにそうしけん
かしみな人もさのみおもひけり・いと哀にかき
りなうおほされて御つかひなどひまなきも

おそろしう物をおほすことひまなし・中将の君
もおとろくしうさまことなる夢を見給て

あはするものをめしてとはせ給へはをよひなう

おほしもかけぬすちのことをあはせけりその中

にたかひめありてつしませ給へきことなん

待るといふにわつらはしくおほえてみつからの夢

にはあらず人の御事をかたるなりこの夢あふま

て又人にまねふなどの給て心のうちにはいかな

ることならんとおほしわたるに此みやの御事き

き給てもじさるやうもやとおほしあはせ給に

いとしくいみじきことのはつくしきこえ給へと

命婦もおもふにいとむくつけうわつらはしき

29
ウ29
オ

まさりてさらにたはかるへきかたなしはかなき
 ひとくたりの御かへしのたまさかなりしもた
 えはてにたり・七月に成てそまいり給ひけ

30
才

るめつらしう哀にていとゞしき御おもひのほと
 かきりなしすくしふくらかになりたまひてうち
 なやみおもやせ給へるはたけににる物なくめて
 たしれいの明暮ごなたにのみおはしまして御あ
 そひもやうゝおかしきころなれは源氏の君も
 いとまなくめしまつはしつゝ御ことぶえなとさま
 さまにつかぶまつらせ給・いみしつゝみ給へと
 しのひかたきけしきのもりいつるおりゝ宮
 もさすかなることゝも おほくおほしつゝけり・
 かのやまてらの人はよろしつなりて出給にけり

京の御すみかたつねて時ゝの御せうそこな
 とありおなしさまにのみあるもことほりなる
 うちに一冊この月ころはありしにまさるものおもひ

30
ウ

にことゝなくてすきゆく・秋の未つかたいと物
 心ほそくてなけき給用のおかしき夜忍ひた
 る所にからうしておもひたち給へるをしく
 れめいてうちそゞくおはする所は六条京こく
 わたりにて内よりなれはすこしほとゝをき心ち
 するにあれたる家のこたちいと物ふりてこく
 らうみえたるありれいの御ともにはなれぬこれ
 みつなんご按察の大納言のいゑに侍り一日も
 のゝたよりにとぶらひて侍りしかはかのおまう
 へいたうよはり給にたれは何事もおほえすと
 なむ申て侍りしときこゆれば哀の事やとぶ
 らぶへかりけるをなとかさなんと物せさりしり
 てせうそせよとの給へは人いれてあないせ
 さすわさとかうたちより給へることゝいはせた
 れは入てかく御とぶらひになんおはしましたる
 といふに・おとろきていとかたはらいたき事
 かなこのひころむけにいとたのもしけなくならせ

31
才

給ひにたれば御たいめんなともあるましといへ
 ともかへしたてまつらんはかしこしとてみなみの
 ひさしひきつくるひていれたてまつる・いと
 むつかしけに侍れとかしこまりをたにとてゆくり
 なう物ぶかきおまし所になんときこゆけに
 かゝるところはれいにたかひておほさる・つねに
 おもひ給へたちなからかひなきさまにのみもて
 なさせ給ふにつゝまれ侍りてなんなやませ
 給ふことをもくともうけたまはらさりけるお
 ほつかなさなときこえ給・みたり心ちはいつとも
 なくのみ侍るかかきりのさまになり侍りてい
 とかたしけなくたちよらせ給へるにみつからき
 こえさせぬことのたますることのすぢたま
 さかにもおほしめしかはらぬやう侍らはかくわりな
 きよはひすき侍りてかならずかすまへさせ給へ
 いみしく心ほそけに見給へをくなんねかひ侍み

31ウ

32オ

ちのほたしに思ひ給つられぬへきなときこえ
 給へり・いと近ければ心ほそけなる御こゑた
 えくきこえていかたしけなきわさにも
 侍るかなこのきみたにかしこまりもきこえ
 たまつへきほとならましかはとの給・哀に
 きく給てなにかあさうおもひたまへむこと
 ゆへかうすきくしきさまをみえたてまつらん
 いかなる契にかみたてまつりそめしより哀
 におもひきこゆるもあやしきまでこの世の
 ことにはおほえ侍らぬなどの給てかひなき心地
 のみし侍るをかのいはけなう物し給御ひとこゑ
 いかてかとの給へは・いてやよろつおほししらぬ
 さまにおほとのごもりいりてなときこゆる
 おりしもあなたよりくるをとしてつへこそこの
 てらにありし源氏の君こそおはしたなれなと
 みたまはぬとの給を人々いとかたはらいたしと

32ウ

33オ

おもひてあなかまときこゆ・いさみしかは心ちの
あしきなくさめきとの給ひしかはそかしとかし
こきこときゝえたりとおほしての給いとをか
しときい給へと人々のくるしとおもひたればき
かぬやうにてまめやか^なる御とふらひをきこえを^せ
給てかへりたまひぬ・けにいぶかひなのけはひや
さりともいとようをしへてむとおほす又の日
もいとまめやかにとふらひきこえ給れいのちい
さくて

いはけなきたつのひとこゑきゝしよりあし
まになつむぶねそえならぬおなし人にやとこ
とさらおさなくかきなし給へるもいみしうお
かしけなればやかて御てほんにと人々きこゆ・少
納言そきこえたるとはせ給へ^ゑはけふをもす
くしかたけなるさまにて山てらにまかりわたる
ほとにて・かうとはせ給つるかしくまりはこの世
ならてもきこえさせむとあり・いと哀々

おほす秋の夕はまして心のいとまなくのみお
ほしみたるゝ人の御あたりに心をかけてあなかち
なるゆかりもたつねまほしき心もまさり給な
るへしきえんそらなきとありし夕おほし
出られて恋しくも又見はおとりやせんとさす
かにあやふし

てにつみていつしかもみむむらさきのねにか
よひける野へのわかくさ十月にすさく院の行
幸あるへしまひ人なとやんことなきいゑの子
ともかんだちめ殿上人ともなともそのかたに
つきゝしきはみなえらせ給へればみこた

ち大臣よりはしめてとりゝのさえともならひ給
いとまなし・やまさと人にもひさしうをとつれ
給はさりけるをおほし出てふりはへつかはしたり
ければそつつの返^り事のみありたちぬる月
の廿日のほとそなんつゝにむなしくみたまへな

してせけんのたうりなれとかなしひおもひ
 給ふるなどあるを見給に世中のはかなき
 も哀にうしろめたけにおもへりし人もいかな
 らんおさなきほとに恋やすらんこみやす所に
 をくれたてまつりしなとはか／＼しからねとお

35
才

もひ出てあさからすとぶらひ給へり・少納言ゆへ
 なからす御返なときこえたり・いみなとすきて
 京の殿になんとき／＼給へはほとへてみつから
 のとかなる夜おはしたりいとすこけにあれ
 たる所の人すくなゝるにいかにおさなき人
 をそろしからむとみゆれいのところにいれた
 てまつりて少納言御ありさまなとうちなき
 つ／＼きこえつゝくるにあひなう御そてまた／＼な
 らす・みやにわたしたてまつらむと侍めるをこ
 ひめきみのいとなきけなくつぎ物におもひ
 きこえ給へりしにいとむけにちこならぬよは

35
ウ

ひのまたはか／＼しう人のおもむきをもみ
 しり給はずなからなる御ほとにてあま
 た物したまふなる中のあなつらはしき人に
 てやましり給はんなどすき給ひぬるもよ
 と／＼もにおほしなけきつるもしるきことお
 ほく侍るにかくかたしけなきなけの御こと
 は／＼のちの御心もたとりきこえさせすいと
 うれしうおもひ給へられぬへきありふしに侍
 りなからすこしもなすらひなるさまに物し
 給はず御手甲よりもわかひてならひ給へれはい
 とかたはらいたく侍るときこゆなにかかうく
 り返しきこえしらする心の程をつ／＼み給ふ
 らむそのいぶかひなき御ありさまの哀に
 床しうおほえ給もちきりことなん心ながらおも
 ひしられけるなをひとつてならてきこ
 えしらせはや
 あしわかのうらにみるめはかくともこは立

36
才

なからかへるなみかめさましからむとの給へは
けにこそいとかしこけれとて

よる波の心もしらてわかのうちらにたまも

なひかんほとそうきたるわりなきことゝきこ

ゆるさまのなれたるにすこしつみゆるされ

給なそこひさらむとちすすし給へるを身に

しみてわかき人々おもへり・君はうへをこひき

こえ給てなきふし給へるに御あそひかたき

とものををしきたる人のおはする宮のおは

しますなめりときこゆれはおき出給て少

納言よなをしきたりつらむはいつら宮のおは

するかとてよりおはしたる御こゑいとゆま

らつたし宮にはあらねと又おほしはなつやつ

もあらずこちとの給をはつかしかりし人とさす

かにきゝなしてあしういひてけりとおほして

めのとにさしよりていさかしねふたきにとの

36
ウ

給へはいまさらになと忍ひたまふらんこの

ひさのうへに御とのこもれよとすこしより給

へとの給へはめのとのはこそかう世つかぬ

御ほとにてなんとてをしよせたてまつりたれ

はなに心もなくみ給へるにてをさしいれて

さくり給へればなよかなる御そにかみはつやく

とがゝりてすゑのふさやかにさくりつけられ

たるほといとうつ、しうおもひやられてを

とらへ給へればうたてれいならぬ人のかく

ちかつき給へるはおそろしうてねなむといふ

物をとてしみてひき、給につきてすへり入

て今はまるそおもふへき人なうとみ給そと

の給めのといてあなつたてやゆゝしうも侍るか

なきこえさせしらせ給ともさらになにのしる

しも侍らし物をとてくるしけにおもひたれ

はざりともかゝる御ほどをいかゝはあらむ猶たゝよ

37
オ37
ウ38
オ

にしらぬ心さしの程を見はて給へとの給あら
 れぶりあれてすこきよのさまなりいかてかつ
 人すくなに心ほそつてすくし給ふらんとうち
 なひ給ていとみすてかたきほとなれはみ^かつし
 まいりね物おそろしき夜のさまなめるを
 とのぬ人にて待らむ人々ちかうさぶらはれよか
 しとていとなれかほにみ帳のうちにいり給へ
 はあやしうおもひのほかにもとあきれてた
 れも／＼あたりめのはつしるめたうわりな
 しとおもへとあらましうきこえさはくへき
 ならねはうちなけきつゝあたり・わかきみはい
 とおそろしういかならんとわなゝかれていとつ
 つくしき御はたつきもそゝろさむけにおほした
 るをらうたくおほえてひとへはかりをゝしくゝみて
 わかちもかつはうたて^お へえ給へは哀にうちかた
 らひ給ていさ給へよおかしき象なとおほくひ
 いなあそひなとする所にと心につくへき」

38
ウ

とをの給けはひのいとなつかしきをおさなき
 心ちにもいといたうもをちすさすかにむつかしう
 ねもいらすおほえてみしろきふし給へり夜ひ
 とよ風ふきあるゝにけにかうおはせさらまし
 かはいかに心ほそからましおなしくはよろしきほと
 におはしまさましかはとさゝめきあへりめのはうし
 るめたさしいとちかぶさぶらふ風すこし吹やみ
 たるに夜ふかう出給もことありかほなりや・
 いと哀にみたまつる御ありさまを今はまし
 てかた時のまもおほつかながるへし明暮なか
 め待るところにわたしたてまつらんかくてのみ
 はいかゝ物をちしたまはさりけりとの給へは・
 宮も御むかへになときこえの給めれとの
 御四十九日過ぎてやなとおもひたまふると
 きこゆれば・たのもしきすちなからもよそく
 にてならひ給へるはおなじうこそうとうお

39
オ39
ウ

ほえ給はめいまよりみたてまつれとあさから

ぬ心さしはまさりぬへくなんとてかひなてつ返かへり

みかちにて出給ひぬ・いみしうきりわたれる空

もたゝらぬにしもはいとしるうをきてまこと

のけさうもおかしかりぬへきにさうくしうおもひ

おはす・いと忍ひてかよひ給ふところのみちなり

けるをおほし出てかとうらたゝかせ給へときゝ

40才

つくる人なしかひなくて御ともにごゑある人して

うたははせ給ふ

あさほらけ霧立空のまよひにも行すき

かたきいもかかとかたとふたかへりうたひたる

によしはみたるしもつかひをいたして

たちとまり霧のまかきのすきつくはくさ

のとさしにさはりしもせしといひかけていりぬ

又人もいてこねはかへるもなさなけれと明行

空もはしたなくて殿へおはしぬ・おかしかりつる

人のなこりこひしくひとりゑみしつゝふし給へり

日たかうおほとのもりおきて文やり給にかく
づきことはもれいならねはふてうちをきつゝ

すさひる給へりおかしきゑなどをやり給・かここ

にはけふしも宮わたり給へりとしころよりもこ

よなうあれまさりひろ物ふりたる所のいと

と人すくなにさひしければみわたし給ひてかゝ

る所にはいかてかしはしもおさなき人のすくし

給はんなをかこにわたしたてまつりてんなに

の所せきほとにもあらずめのとほさうしなと

してさふらひなむきみはわかき人々などあれ

41才

はもろともにあそひていとう物し給ひんなな

との給ちかうよひよせてまつり給へるにか

の御うつりかのいみしうえむにしみかへりたまへ

れはおかしの御にほひや御そはなへてと心くるし

けにおほひたりとしころもあつしくさたすき

給へる人にそひ給へるかこにわたりてみなら

し給へなと物せしをあやしうとみ給て人
 も心をくめりしをかゝるおりにしも物し給はん
 も心くるしうなどの給へはなにかは心ほそくとも
 しはしはかくておはしましなすこし物の心おほし

41ウ

しりなんにわたらせ給はんこそよきは侍へけれ
 ときこゆよるひるこひきこえ給にはかなき物
 もきこしめさすとてけにいたうおもやせ給へ
 れといとあてにうつくしくながくみえ給・なにか
 さしもおほすいまは世になき人の御ことはかひな
 しをのれあれはなとかたらひきこえ給ひて
 くるれはかへらせ給をいと心ほそしとおほいてない
 給へは宮うちなき給ていとかうおもひないり
 給そけふあすわたしたてまつらんとかへすく
 こしらへをきて出給ひぬなこりもなくさめかた
 うなきみ給へり・ゆくさきの身のあらんことなと
 まてもおほししらすたとしころろたちはなるく

42オ

おりなつまつはしならひていまはなき人となり
 給にけるとおほすかみしきにおさなき御心
 ちなれとむねつとふたかりてれいのやうにも
 あそひ給はすひるはさてもまきはし給を夕暮
 となれはいみしくし給へはかくてはいかてか過
 し給はんとなくさめわひてめのともなきあへ
 り・きみの御もとよりはこれみつをたてまつ
 れ給へりまいりくへきを内よりめしあれはなむ
 心くるしうみたてまつりしもしつ心なくとてと
 のぬ人たてまつれ給へり・あちきなうもある
 かなたはふれにても物のはしめにこの御事よ
 宮きこしめしつけはさぶらふ人々のをろかなる
 にそさいなまれんあなかしこ物のついでにいはい
 なくうち出きこえさせ給なといふもそれを
 はなにともおほしたらぬそあさましきや・少納言
 はこれみつに哀なる物かたりともしてありへ
 てのちやさるへき御すくせのかれきこえ給はぬ

42ウ

やつもあらんたゝいまはかけてもいとにけなき

御ことゝみたてまつるをあやしうおほしの給はず

るもいかなる御心にか おもひよるかたなつみ

たれ侍けふも宮わたらせ給てうしろやすく

つかうまつれ心おさなくもてなしきこゆなどの

給はせつるもいとわつらはしうたゝなるよりは

かゝる御すきこともおもひ出られ侍つるなといひ

てこの人も事ありかほにやおもはんなどあひ

なければいたうなけかしけにもいひなさすた

いふもいかなることにかあらんと心えかたうおもふ・

まいりてありさまなときこえければ哀におほし

やらるるれとさてかよひ給はんもさすかにすゝ

るなる心ちしてかるくしうもてひかめたると

人もやもりきかむなとつゝましければたゝむかへ

てんとおほす御文はたひくゝたてまつれ給ふく

るれはれいのたいふをそたてまつれ給さはる

43
才43
ウ

事とも。ありてえまいりこぬをゝろかにやなと

あり宮よりあすにはかに御むかへにとの給。せ

たりつれば心あはたゝしくてなむとしころ

のよもきふをかれなんもさすかに心ほそつさ

ふらふ人々もおもひみたれてとことすくなに

いひておさくあへしらはす物ぬいいとなむけはひ

なとするければまいりぬ・君は大殿におはしけ

るにれいの女君とみにもたいめんしたまはず

物むつかしくおほえ給てあつまをすかゝきてひた

ちにはたをこそつくれといふうたをこゑはいと

なまめきてすさひぬ給へりまいりたればめし

よせてありさまとひ給しかくゝなんときこゆ

れはくちおしうおほしてかの宮にわたりなはわ

さとむかへ出んもすきくしかるへしおさなき

人をぬすみ出たりともときおひなんそのさきに

しはし人にもくちかためてわたしてんとおほして・

しはし人にもくちかためてわたしてんとおほして・

44
才44
ウ

あかつきかしこにものせんくるまのさうそくさな
 らすいしんひとりふたりおほせをきたれとの給
 うけたまはりてたちぬきみいかにせましきこ
 えありてすきかましきやうなるへきこと人の
 ほとたに物をおもひしり女の心かはしけること
 をしはかられぬへくはよのつねなりち宮のたつ
 ね出給つらんもはしたなうすゝるなるへきをとおほ
 しみたるれとさてはつしてんはいとくちおしかる
 へければまた夜ふかう出給・女君れいのしふく
 に心もとけす物し給かしこにいとせちにみるへき
 事の侍るをおもひたまへ出て・なんとちかへり
 まいりきなむとて出給へはさぶらぶ人々もしらさり
 けりわか御かたにて御なをしなとはたてまつる
 これみつばかりを馬にのせておはしぬかとうちた
 かせ給へは心もしらぬ物のあけたるに御くるま
 をやをらひきいれさせてたいふつまとをならし
 てしはふけは少納言きゝしりていてきたりこ

45
才

こにおはしますといへはおさなき人は御とのこも
 りてなむなとかいと夜ふかうは出させ給つると
 物のたよりとおもひていふ宮へわたらせ給へかな
 るをそのさきにきこえをかんとしてなんとの給へ
 はなにことにか待らんいかにはかゝしき御いらへきこ
 えさせ給はんとてうちわらひてゐたり君入給へは
 いとかたはらいたくうちとけてあやしきふる人
 ともの侍にときこえさすまたおとろい給はしな
 いて御めさましきこえむかゝるあさきをしらて
 いぬる物かとして入給へはやともえきこえず君
 はなに心もなくね給つるをいたきおとろかし給に
 おとろきて宮の御むかへにおはしたるとねおひ
 れておほしたり御くしかきつくろひなとし給て
 いさ給へ宮の御つかひにてまいりきつるその給
 にあらさりけりとあきれておそろしとおも
 ひたればあな心うまるもおなし人そとてかき

45
ウ46
才

いたきて出給へはたいふ少納言などこはいかに
 ときこゆ・こゝにはつねにもえまいらぬかおほつ
 かなければ心やすき所にときこえしを心う
 くわたり給へかなればましてきこえかたかへけれ
 は人ひとりまいられよかしの給へは心あはたしく
 てけふはいとひんなくなん侍へき宮のわたらせ
 給はんにはいかさまに きこえやらんをのつから程へ
 てさるへきにおはしまさはともかうも侍なんをい
 とおもひやりなきほどの御ことに侍ればさぶら
 ふ人々くるしう侍へしときこゆればよしのちにも
 人はまいりなむとて御車よせさせ給へはあき
 ましういかさま かとおもひあへりわかきみもあや
 しとおほしてないたまふ少納言とゞめきこえ
 むかたなければ ぬひし御そともひきさけて
 みつからもよろしききぬゞきかへてのりぬ・二条
 院はちかければまたあかうもならぬ程にお

はしてにしのたいに御車よせておりたまふわかき
 みをはいとかるゝかにかきいたきておろし給少納
 言なを 夢の心ちし侍るをいかにし侍るへき事
 にかとやすらへはそは心なゝり御みつからわたしたて
 まつりつればかへりなんとあらはをくりせんかした
 の給にわりなくておりぬにはかにあさましうむね
 もしつかならず宮のおほしの給はんこといかな
 りはて給ふへき御ありさまにかとてもかくて
 もたのもしき人々にをくれ給へるかいみじさと
 おもふに涙のとまらぬをさすかにゆゝしければ
 ねむしむたり・こなたはずみ給はぬたいなれば御
 帳なともなかりけりこれみつめてみ帳御屏風
 なとあたり／＼したてさせ給御きちやうのかたひら
 ひきおろしおましなと ひきつくるふばかりにて
 あればひんかしのたいに御とのるものめしにつかは
 しておほとのもりぬ・若君いとむくつけうい
 かにすることならんとふるはれ給へとさすかにこゑ

たてゝもえなき給はず少納言かもとにねん

との給こゑいとわかし今はさはおほとこのこもるま
しきそよとをしへきこえ給へはいとわひしくて

なきふし給へりめのとほうちもふされず物もおほ
えすなきぬたり・明行まゝに見わたせばおとゝ
のつくりさましつ。ひさまさらにもいはす庭のす
なこも玉をかさねたらんやうにみえてかゝやく心
ちするにはしたなくおもひぬたれとこなたに

は女なともさふらはさりけりうときまらうとなと
のまいるおりふしのかたなりければおとことも
そみすのたにありける・かく人むかへ給へりとほ
のきく人はたれならんおほるけにはあらしとさゝ
めく御てうつ御かゆなとこなたにまいるひたかう

ねおき給てひとなくてあしかめるをさるへき人々

ゆふつけてこそ はむかへさせ給はま世給はめとの給
てたいにわらはへめしにつかはすちいさきかきりこと

48才

48才

さらにまいれとありければいとをかしけにて四人
まいりたり君は御そにまとはれて物し給つる

をせめておこしてかううくなおはせせずゝるな
る人はかうはありなむや女は心やはらかなるなん
よきなといまよりをしへきこえ給御かたちはさし
はなれてみしよりもいみじきよらにてなつかしう
うちかたらひつゝをかしきゑあそび物ともとり

つかはしてみせたてまつり御心につくこととをも
し給ふやう／＼おきぬて見給にゝひいろのこまや
かなるかうちなへたるともをきてなに心なくうち
ゑみなとしてゑ給へるかいとつつくしきにわれも
うちゑまれて見給・ひんかしのたいにわたり給へる
に立出て庭のこたち池のかたなどのそき給

へは霜かれのせんさいゑにかけるやうにおもしろく
てみもしらぬしる五ぬこきませにひまなう

いていりつゝけにおかしき所かなとおほす御屏
風ともなど いとおかしきゑをみつゝなくさめておは

49才

するもはかなしや・君は二三日内へもまいり給はて
 この人をなつけかたらひきこえ給やかてほん
 にとおほすにやてならひ氣なとさま／＼にかき
 つゝみせたてまつり給いみしうおかしけにかきあ
 つめ給へりむさし野といへはかこたれぬとむらさ
 きのかみにかいたまへるすみつきのいとことな
 るをとりてみぬ給へりすこしちいさくて
 みはみねと哀とそおもふむさし野の露わけ
 わふる草のゆかりをとありいてきみもかはた
 まへとあれはまたようはかゝすとて見あげ給へる
 かなに心なくつつくしけなれはうちほゝゑみてよから
 ねとむけにかゝぬこそわろけれをしへきこえむかし
 との給へはうちそはみてかいたまふてつき筆とり
 給つるさまのおさなけなるもらうたうのみお
 ほゆれは心なからあやしとおほすかきそこなひ
 つとはちてかくし給ふをせて見給へは

50
才49
ウ

かこつへきゆへをしらねはおほつかないかなる
 草のゆかりなるらんといとわかかれとをひさき
 みえてふくよかにかい給へりこあま君のにそに
 たりけるいまめかしゆきてほんならばはいとよう
 かいたまひてんと見給^まひいなとわさとやとも
 つくりつゝけてもるともにあそひつゝこよなき
 物おもひのまきはしなりかのとまりにし
 人々宮わたり給てたつねきこえ給けるにき
 こえやるかたなくてそわひあへりしけるしは
 し人にしらせしときみもの給ひ少納言もお
 もふ事なればせちにくちかためやりたりたゝ
 ゆくゑもしらす少納言かあてかくしきこえたる
 とのみきこえさするに宮もいぶかひなうおほし
 てこあまきみもかしこにわたり給はんことをいと
 物しとおほしたりしことなればめのとのいとさし
 すくしたる心はせのあまりおひらかにわたさんを

50
ウ51
才

ひんなしなどはいはて心にまかせてゐてはぶら
 かしつるなめりとなく／＼かへり給ぬもしきゝいて
 たてまつらはつげよとのたまふもわつらはしく
 そうつの御もとにもたつねきこえ給へとあと
 はかなくてあたらしかりし御かたちなどこひ
 しくかなしとおほす・きたのかたまはゞきみを
 にくしとおもひきこえ給ける心ちもうせてわか
 心にまかせつへうおほしけるにたかひぬるはくち

51
ウ

おしうおほしけり・やう／＼人まいるぬ御あそひかたき
 のわらはへちこともいとめつらかにいまめかしき御
 ありさまともなれはおもふことなくてあそひあへ
 り君はおとこきみのをおはせずなとしてさうまく
 しき夕暮などはかりそあまきみをこひきこ
 え給てうぢなきなとし給へと宮をはことこ
 おもひいてきこえ給はずもとより見ならひき
 こえ給はてならひたまへれば今はたゝこのゝち
 のおやをいみしうむつひまつはしきこえ給もの

よりおはずあはまついてむかひて哀にうちかた

52
オ

らひ御ふところにいりゐていさゝかうとくはつかし
 ともおもひたらすするかたにはいみしくらう
 たきわさなりけりさかしら心ありなにくれと
 むつかしきすちになりぬればわか心ちもすこ
 したかふふしもいてくやと心をかれ人もうらみ
 かちにおもひのほかのことをもをつからいてくる
 をいとをかしきもてあそひなりむすめなど
 はおたかはかりになれは心やすくうちふるまひへた
 てなきさまにふをきなどはえしもすましき
 をこれはいとさまかはりたるかしつきくさなり
 とおほひためり

53
オ

(末つむはな)

おもへともなをあかさりし夕かほの露にをく
 れしほどの心ちをとし月ふれとおほしわすれす
 こゝもかしこもうちとけぬかきりのけしきは
 み心ぶかきかたの御いとましさにけちかくなつか
 しかりしあはれににる物なうこひしくおほえ
 給いかてことくしきおほへはなくらうたけなら
 む人のつゝましきことなからん見つけてしかな
 とこりすまにおほしわたれはすこしゆへつきてき
 こゆるわたりは御みゝとまり給はぬくまなきにさ
 てもやとおほしよるはかりのけはひあるあたり

1
才

のほとしらぬやうにさてしもすくしはてすな
 くくつれおれてなをくしきかたにさたまりな
 とするもあれはたまひさしつるもおほかりけり
 かのうつせみを物のおりくにはねたうおほしいつ
 おきのはもさりぬへきかせのたよりあるときは
 おとろかし給ふおりもあるへしほかけのみた

1
ウ

れたりしさまは又さやうにても見まほしくおほ
 す大かたなこりなき物わすれをそえし給はさ
 りけるさゑもめのとて大弐のあま君の
 さしつきにおほいたるかむすめ大輔の命婦とて
 内にさふらふわかんとほりの兵部大輔なるかむす
 めなりけりいといたういろこのめるわか人にてあり
 けるを君もめしつかひなとし給ふはは筑前守
 のめにてくたりにければちゝ君のもとをさとにて
 ゆきかよふこひたちのみこのすゑにまうけていみ
 じうかしつき給ひし御むすめ心ほそくて残り

2
オ

ゐ給たるを物ついてにかなり聞えければあはれの
 ことやとてとひきゝ給こゝろはえかたちなとふかき
 かたはえしり侍らすかいひそめ人うとうもてなし
 給へはさへきよひなと物こしにてそかたらひ侍る
 きんをそなつかしきかたらひ人と思給へると聞
 ゆれば三のともにていまひとくさやうたてあらん
 とてわれにきかせよちゝみこのさやうのかたにいと
 よしつきて物し給ければをしなへてのてつかひ
 にはあらしと思ふかたらひたまふさやうにきこしめ
 すはかりには侍らすやあらんといへはいたうけしき
 はましやこのころのおほろ月よにしのひてもの
 せんまかてよとのたまへはわつらはしとおもへとうち
 わたりものどやかなる春のつれゝにまかてぬちゝの
 たいふの君はほかにそすみけるこゝにはときゝ
 そかよひける命婦はまゝはゝのあたりはすみも
 つかす姫君の御あたりをむつひてこゝには来る
 なりけりのたまひしもしるくいさよひの月おか

2ウ

しきほとにおはしたりいとかたはらいたきわさ
 かな物のねすむへき夜のさまにも侍らさめるに
 と聞ゆれとなをあなたにわたりてたゝひとこゑ
 もよほし聞えよむなしくてかへらんかねたかるへき
 をとの給へはうちとけたるすみかにすへ奉りて
 うしろめたうかたしけなしとおもへと寝殿にま
 いらたればまたかうしもさなからむめのかをかしき
 を見いたして物し給ふよきおりかなとおもひて
 御ことの音いかにまさり侍らんとおもふ給へらるゝ
 夜のけはひにさそはれ侍てなん心あはたゝしき
 いていりにえうけたまはらぬこそくちおしけれと
 いへはあはれはしる人こそあなれもゝしきに
 ゆきかふ人のきくはかりやはとてめしよするも
 あいなづいかゝきゝ給はんとむねつふるほのかに
 かきならし給ふをかしう聞ゆなにはかりふかきて
 ならねと物のねからのすちことなる物なればきゝ

3オ

3ウ

にくゝもおほされずいといたうあれわたりてさひ
しき所にさはかりの人のふるめかしう所せくか
しつきすへたりけんなこりなくいかにおもほし
のこす事ながらんかやうの所にこそはむかし物
かたりにもあはれなる事ともありけれなとおもひ
つゝけて物やいひよらましとおほせとうちつに
やおほさんと心はつかしくてやすらひ給命婦

かとおるものにていたうみゝならさせ奉らしと
おもひけれはくもりかちに侍りまらうとのこんと
侍りつるいとひかほにもこそいま心のとかにをみ
かうしまいりなんとていたうもそゝのかさてかへり
たれは中くゝなるほどにててもや見ぬるかな物きゝ
わく程にもあらでねたうとのたまふけしきおか
しとおほしたりおなしくけちかきほとのとちきゝ
せさせよとのたまへと心にくゝてとおもへはいてや
いとがすかなるありさまにおもひきえて心くる
しげに物し給ふめるをうしろめたきさまに

4才

やといへはけにさもある事にはかにわれもも
うちとけてかたらふへき人のきはゝきはとこそ
あれなとあはれにおほさるゝ人の御ほとなれは猶
さやうのけしきをほめかせとかたらひ給ふ又ち
きり給へるかたやあらんいとしのひてかへり給ふ
うへのまめにおはしますともてなやみ聞えさせ
給ふこそをかしう思ふ給へらるゝおりくゝ侍れか
やうの御やつれすかたをいかてかは御覧しつげんと
聞ゆればたちかへりうちわらひてこと人のいはんやう
にとかなあらはされそこれをあたゝしきふるま
ひといはゝ女のありさまくるしからんとのたまへは
あまり色めいたりとおほしておりくゝかうの給ふを
はつかしとおもひて物もいはすしん殿のかたに人
のけはひきくやうもやとおほしてやをらたち出給ふ
すいかいのたゝすしおれのこりたるかくれのかたに立
より給ふにもとよりたてゑおとこ有けりたれならん

4ウ

5才

心かけたるすきものありけりとおほしてかけにつき
 てたちかくれ給へは頭中将なりけりこの夕つかた
 内よりもろともまかて給ひけるやかて大とのにも
 よらす二条院にもあらてひきわかれ給けるをい

5ウ

つちならんとたゝならてわれもゆくかたあれとあ
 とにつきてつかゝひけりあやしきむまにかり衣
 すかたのなにかしろにてきければえしり給はぬに
 さすかにかうことかたに入給ひぬれば心もえす
 おもひける程に物のねにきゝついでたてるに
 かへりや出給ふとしたまつなりけり君はたれと
 もえ見わき給はてわれとしられしとぬきあし
 にあゆみのきたまふにぶとよりてふり捨てせ
 給へるつらさを御をくりつかうまつりつるは
 もろとも大内山はいてつれといるかたし

6オ

らぬいさよひの月とらむるもねたけれこの
 君と見給ふにすこしをかしようなりぬ人の思ひ

よらぬ事よとにくむく

里わかぬかけをのみれとゆく月の入さの山
 をたれかたつめるかうしたひありかはいかにせさ
 せ給はんと聞えたまふまことはかやうの御ありき
 にはすいしんからこそはかくしき事もあるへ
 けれをくらすせ給はてこそあらめやつれたる
 御ありきはかるくしきこともいてきなむと
 をしかへしいさめたてまつるかうのみ見つけら
 るゝをねたしとおほせとかのなてしこはえたつ
 ねしらぬををもきこうに御心のうちにおほしいつ
 をのくちぎれるかたにもあまえてえゆきわ
 かれ給はずひとつ車にのりて月のをかしきほ
 とに雲かくれたるみちのほとふえぶきあはせて大
 殿におはしぬさきなともをはせ給はす忍ひ入て
 人見ぬらうに御なをしともめしてきかへたまひ
 つれなついまくるやうにて御ふえともぶきすさひ
 ておはすればおとゝれいのきゝすくしたまはて

6ウ

こまぶえとりいて給へりいとしゃうずにおはずれば

7
才

いとおもしろうぶき給御ことめしてうちにもこ

のかたにこゝろえたる人々にひかせ給ふ中務の君

わさとひはひけと頭の君心かけたるをもては

なれてたゝこのたまさかなる御けしきのなつかし

きをえそむき聞えぬにをのつからかくれなくて

大宮なともよろしからすおほしなりたれば物思は

しくはしたなき心ちしてすさましけによりふ

したりたえて見たてまつらぬ所にかげはなれなん

もさすかに心ほそくおもひみたれたり君たちは有

つるきんの音をおほしてゝあはれけなりつ

7
ウ

るすまぬのさまなともやつかへてをかしう思ひ

つゝけあらましことにいとらうたき人のさてと

し月をかさぬめたらんとき見そめていみしう

心くるしくは人にももてさはかるはかりやわか心

もさまあしからんなとさへ中将はおもひけり比

君のかうけしはみありき給ふをまささにさては

すくし給てむやとなまねたうあやつかりけり

そのゝちこなたかなたより文なとやりたまふへし

いつれも返事みえすおほつかなつ心やましきに

あまりうたてもあるかなさやうなるすまぬす

8
才

る人は物おもひしりたるけしきはかなき木く

さ空のけしきにつけてもとりなとして心よせ

をしはからるゝおりくあらんこそあはれなるへけれ

をもしとてもいとかうあまりむもれたらんは心

つきなくわかひたりと中将はまいて心いられし

けりれいのへたて聞え給はぬ所にてしかくの返

事は見給ふやこゝろみにかすめたりしこそは

したなくてやみにしかとつれふればされはよ

いひよりにけるをやとほゝゑまれていさ見んと

しもおもはねはにや見るとしもなしといらへ給を

8
ウ

人わきしけるとねたふ思ふ君はぶかうしも思

はぬ事のかうなさけなきをすさましく思ひなり
 給ひにしかとかうの中將のいひありきけるを
 ことおほくいひなれたらんかたにそなひかんかし
 たりかほにももとのことをおもひはなちたらんけし
 きこそうれはしかるへけれとおほして命婦を
 まめやかにかたらひ給ふおほつかなうもてはなれた
 る御けしきなんいとこゝろつきすきしきかた
 につたかひよせ給ふにこそあらめさりともしみしか
 き心はえつかはぬものを人の心のとやかなる

9
才

事なくともおもはずにのみあるになんをのつから我
 あやまちにも成ぬへき心のとかにおやはらからの
 もてあつかひつらむるもなう心やすからん人は
 中くなんらつたかるへきをとのたまへはいてやさ
 やつにをかしきかたの御かさやとりにはえしもやと
 つきなげにこそみえ侍れひとへに物つみしひき
 いらたるかたはしもありかたうものし給ふ人になん
 と見るありさまかたり聞ゆらうしうかどめき

たる心はなきなめりいとこめかしうおほとかなら
 んこそらつたくあるへけれとおほしわすれすの

9
ウ

たまふわらはやみにわつらひ給人しれぬ物おもひ
 のまきれも御心のいとまなきやうにて春夏過ぬ
 秋のころほひしつかにおほしつめてかのきぬた
 のをともしつきてきにくかりしさへ恋し
 うおほし出らるゝまゝに常陸の宮にはしはくき
 こえ給へとなをおほつかなうのみあれはよつかす
 心やましうまけてはやましの御心さへそひて命
 婦をせめ給ふいかなるやうそいとかる事こそ
 またしらねといと物しとおもひての給へはいと
 おしとおもひてもてはなれてにけなき御事とも
 おもむけ侍らすたおほかたの御ものつみのわり
 なきにてをえさしいて給はぬとなん見給ふるとき
 こゆればそれこそはよつかぬ事なれものおもひ
 するましきほとひとり身をえ心にまかせぬほと

10
才

こそさやうにかゝやかしきもことほりなれなに事も
 おもひしつまり給へなんとおもふにこそそこはかと
 なくつれくゝにこゝろほそつのみおほゆるをおな
 し心にいらへたまはんはねかひかなふ心ちなんすへき
 なにやかやとよつけるすぢならてそのあれたる
 すのこにたゝすまゝほしきなりいとおほつかなう

こゝろえぬ心ちするをかの御ゆるしなうともた
 はかれかし心いられしうたであるもてなしには
 よもあらしなとかたらひ給ふなをよにある人の
 ありさまをおほかたなるやうにてきゝあつめみゝ
 とゝめ給くせのつき給へるをさうくゝしきよひゐ
 などにはかなきついでにさる人こそとはかりき
 こえ出たりしにかくわさとかましうの給わたれは
 なまわつらはしく姫君の御ありさまのよつかはし
 くよしめきなともあらぬを中くゝなるみちひき
 にいとほしき事や見えんなとおもひけれと

10
ウ11
オ

君のかうまめやかにのたまふにきゝいれさらんも
 ひかくゝしかるへしちゝみこおはしけるおりにたに
 ふりにたるあたりとてをとなひ聞ゆる人もなかり
 けるをまして今はあさちわくる人もあとたえた
 るにかく世にめつらしき御けはひのもりにほひく
 るをはなま女はうなとも系みまけてなをきこえ
 たまへとそゝのかし奉れとあさましう物つゝみ
 し給ふ心にてひたふるに見もいれ給はぬなりけり
 命婦はさらはさりぬへからんおりに物こしにきこえ
 給はんほと御心につかすはさてもやみねかし又さる

へきにてかりにもおはしかよはんをとかめ給ふ
 へき人なしなとあためきたるはやり心はうち思ひ
 てちゝ君にもかゝる事なともいはさりけり八月廿
 よ日よひすくるまでまたるゝ月の心もとなきに
 ほしのひかりはかりさやけく松のこす系ぶくかせの
 をとこゝろほそくていにしへの事かたり出てう
 ちなきなし給ふいとよきおりかなとおもひて御せう

11
ウ

そこや聞えつらんれいのいとしのひておはしたり
 月やうくいてゝあれたるまかきのほととまし
 くつちなかめ給ふにきんそゝのかされてほのかにかき

12才

ならし給ほとけしうはあらずすこしいまめきたる
 けをつけはやとそみたれたる心には心もとなくおも
 ひぬたる人めしなき所なれはこゝろやすく入
 給ふ命婦をよはせたまふいましもおとろきかほ
 にいとかたはらいたきわさかなしかくこそおはし
 たなれつねにかくつらみ聞え給ふを心になはぬ
 よしをのみ聞えすまひ侍れはみつからことはり
 も聞えしらせんとの給ひわたるなりいかゝ聞えかへさ
 んなみくのたはやすき御ふるまひならねは
 心くるしきを物こしにて聞え給はん事きこし

12才

めせといへはいとはつかしとおほして人にもの
 聞えんやうもしらぬをとておくさまへあさり入給
 さまいとつぬくしけなりうちわらひていとわ

かくしうおはしますこそ心くるしけれかきりな

き人もおやのあつかひうしろみ給ふほとこそ

わかひ給ふもことはりなれかばかり心ほそき御有

さまになを世をつきせずおほしはゝかるはつき

なうこそとをしへ聞ゆさすかに人のいふことはつ

ようもいなひぬ御こゝろにていらへ聞えてたゞき

けとあらはかうしなとさしてはありなんとの給ふ

すのこなとはひんなう侍りなんをしたちてあはく

しき御ふるまひなとはよもなといとよくいひな

してふたまのきはなるさうし手つからいとつよく

さして御しとねうちをきひきつくるふいとつゝま

しけにおほしたれとかやうの人に物いふらん心はえ

なともゆめにしり給はさりければ命婦のかう

いふをあるやうこそはとおもひてものし給めのと

たつおひ人なとはさうしに入ふしてゆふまとし

たるほとなりわかき人二三あるは世にめてられ

給御ありさまをゆかしきものにおもひきこえて

13才

心けさうしあへりよろしき御そたてまつりかへ
 つくろひ聞こゆればさうしみはなにのこゝろけ
 さうもなくはおはすおとこはいとつきせぬ御さ
 まをうちしのひよういし給へる御けはひいみ
 しうなまめきて見しらんにこそ見せめなに
 のはえあるあるましきわたりをあないとおしと命
 婦はおもへとたゝおほとかに物し給ふをそつ
 しろやすくさしすぎたる事は見えたてまつり
 たまはしとおもひけるわかつねにせめられたてま
 つるつみさりことに心くるしき人の御物おもひや
 いてこんなとやすからすおもひぬたり君は人の御
 ほとをおほせはされくつかへる今やうのよしはみ
 よりはこよなうおくゆかしとおほしわたるにとかつ
 そゝのかされてゐさりより給へるけはひしのひ
 やかにえひのかいとなつかしうかほりいてゝおほ
 とかなるをされはよとおほすとしころおもひわ

13
ウ14
オ

たるさまなといとよくのたまひつゝくれとまし
 てちかき御いらへはたえてなしわりなのわざやと
 うちなけきたまふ
 いくたひか君かしゝまにまけぬらんものな
 いひそといはぬたのみにのたまひもすてゝよかし
 たまたすきるしとのたまふ女君の御めのと侍従
 とてはやりかなるわか入いと心もとなうかたはら
 いたしとおもひてさしよりにてきこゆ
 かねつきてとちめんことはさすかにてこた
 へまつきそかつはあやなきいとわかひたるこゑの
 ことにをもりかならぬを入つてにはあらぬやうに
 聞えなせはほとよりはあまえてきゝ給へとめつ
 らしきに中／＼くちふたかるわさかな
 いはぬをもしふにまさるとしりなからをしこめ
 たるはくるしかりけりなにやかやとはかなき事
 なれとをかしきさまにもまめやかにもの給へと

14
ウ15
オ

なにのかひなしいとかゝるもさまかへて思ふかた
ことに物し給ふ人にやとねたくてやをらをし

あけて入給ひにけり命婦あなうたてたゆめ

給へるといとをしければしらすかほにてわかたへ

いにけりこのわか人ともはた世にたくひなき御有

さまのつみゆるし聞えておとろくしうもなけ

かれすたゝおもひもよらすにはかにてさる御

心もなきをそおもひけるさつしみはたゝわれ

にもあらずはつかしくつゝましきよりほかの事

又なければ今はかゝるそあはれなるかしました

よなれぬ人のうちかしたつかれたると見ゆるし給

物からこゝろえすなまいとおしくおほゆる御さま

なりなに事につけてかは御心のとまらんうち

うめかれて夜ふかういて給ぬ命婦はいかならん

ときゝふせりけれとしりかほならしとて御をく

りにともこはつくらす君もやをらしのひていて

給ひにけり二条院におはしてうちぶし給ても

15
ウ

なを思ふひにかなひかたき世にこそとおほしつゝけ

てかるらかならぬ人の御ほとを心くるしとそお

ほしけるおもひみたれておはするに頭中將きて

こよなき御あさいかなゆへあらんかしとこそ思ひ

給へらるれといへはおきあかり給て心やすきひと

りねのここにてゆるひにけりや内よりかとの給へ

はしかまかて侍るまゝなり朱雀院の行幸けふ

なん楽人舞人さためらるへきよし夜へうけ給

はりしをおとゝにもつたへ申さんとてなんまかて侍

やかてかへりまいりぬへう侍りといそかしけなれば

さらはもろともにとて御かゆこはいひめしてまらう

とにもまいりたまひてひきつゝけたれとひとつに

たてまつりてなをいとねふたけなりととかめ

いてつゝかくい給ふ事おほかりとそうらみ聞え

給ふ事ともおほくさためらるゝ日にて内にさぶ

らひくらし給つかしこにはぶみをたにといとお

16
ウ16
オ

しくおほしてゝゆぶつかたそありけるあめぶり
 いてゝ所せくもあるにかさやとりせんとはたお
 ほされすやありけんかしこにはまつほとすぎ
 て命婦もいとゝおしき御さまかなと心つく思
 けりさうしみは御こゝろのうちにはつかしう思

つゝけ給ひてけさの御ふみのくれぬるもとかつ
 しも中ゝおもひわき給はさりけり

夕暮のはるゝけしきもまた見ぬにいふ

せさそふるよひのあめかな雲ままちいてんほ

とにかに心もとなうとありおはしますましき御

けしきを人々むねつふれておもへとを聞え

させ給へとそゝのかしあへれといとゝおもひみたれ

給へるほどにてえかたのやつゝけ給はねは

夜ふけぬとて侍従それいのをしへ聞ゆる

はれぬよの月まつさをおもひやれおなし

こゝろになかめせずともくちゝにせめられてむら

17才

17才

さきのかみのとしへにければはいをくれふるめいた
 るにてはさすかにもしつようなかさたのすちにて
 かみしもひとしくかい給へり見るかひなううち
 をきたまふいかにおもふらんとおもひやるもやすか
 らすかゝることをくやしなといふにやあらんさり
 とてはいかゝはせんわれさりとも心なかう見はて天
 とおほしなす御こゝろをしらねはかしこにはいみ

しうそなけい給けるおとゝ夜に入てまかて給

にひかれたてまつりて大殿におはしましぬ行幸の

18才

ことをけうありとおほして君たちあつまりての
 たまひをのゝ舞ともならひ給ふをそのころの
 事にてすきゆく物の音ともつねよりもみゝかし
 かましくてかたゝいとみつゝれいの御あそひな
 らす大ひちりきさくはちのふえなどの大こゑを
 ふきあけつゝたいこをさへかうらんのもとにまら
 はしよせて手つからうちならしあそひおはさうす
 御いとまなきやうにてせちにおほすとこゝろはかり

にこそぬすまはれ給へかのわたりにはいとおほつか
なくて秋くれはてぬなをたのみこしかひなく

てすきゆく行幸ちかくなりてしかくなとのゝしる

ころそ命婦はまいれるいかにそなととひ給ひて

いとほしとはおほしたりありさま聞えていとかうもて

はなれたる御こゝろはえは見給ふる人さへ心くるし

くなとなきぬはかりおもへり心にくゝもてなしてや

みなんとおもへりしことをくたいてける心もなく

この人の思ふらんをさへおほすさうしみのものはい

はておほしうつもれ給ふらんさまおもひやり給も

いとほしければいとまなきころそやりなしと打

なけいたまひてもおもひしらぬやうなる心さまを

ころさんとおもふそかしとほゝゑみたまへるわかうつ

つくしけなればわれもうちゑまるゝ心ちしてわり

なの人にうらみられ給御よはひやおもひやりすく

なう御心のまゝならんもことほりとおもふこの御いそ

18
ウ19
オ

きのほとすくしてそときくおはしけるかのむら

さきのゆかりたつねとり給てはそのうつくしひに

心いり給て六条わたりにたにかれまさり給ふめれば

ましてあれたるやとはあはれにおほしをこたらす

なからものうきそわりなかりける所せき御物はち

を見あらはさんの御心もことになくてすきゆくを

又うちかへし見まさりするやうもありかし手さ

くりのたとくしきにあやしう心えぬ事もある

にやみてしかなとおほせとけさやかにとりなさん

もまはゆしうちとけたるよひあのほとやをら入

給てかうしのはさまより見給けりされとみつから

は見え給ふへくもあらずきちやうなといたくそこ

なはれたる物からとしへにけるたちとかはらすをし

やりなとみたれねは心もなくてこたち四五人

ゐたり御たいひそくやうのもるこしのものなれと

人わるきになにのくさはひもなくあはれけなる

19
ウ20
オ

まかてゝ人々くふすみのまはかりにそいとさむけ
 なる女はらしるきゝぬのいひしらすゝけたる
 きたけなるしひらひきゆひつけたるこし
 つきかたくなしけなりさすかにくしをしたられてさ
 したるひたいつき内教坊内侍所のほとにかゝる
 ものとものあるはやとをかしかけても人のあたり
 にちかうふるまふ物ともしり給はさりけりあはれ
 さもさむきとしかないのちなかけれはかゝる世に
 あふ物なりけりとてうちなけくもあり故宮おは
 しましゝよをなとてからしとはおもひけんかく
 たのみなくてもすくるものなりけりとてとひ
 たちぬへくふるぶもありさまゝに人わるき事
 とををうれへあへるをきゝ給ふもかたはらいたけ
 れは立のきてたゝ今おはするやうにてうちたゝ
 き給ふそゝやなといひて火とりなほしかうしは
 なちていれたてまつる侍従は齋院にまいり通ふ
 わか人にてこのころはなかりけりいよゝあやしう

20
ウ

ひなひたるかきりにて見ならはぬ心ちぞするいとゝ
 うれふなりつるゆきかきたれいみしうふりけり
 そらのけしきはけしうかせふきあれておほと
 なぶらきえにけるをともしつくる人もなしかの物
 にをそはれしおりおほし出られてあれたるさまは
 をとらさめるをほととせはう人けのすこしある
 などになくさめたれとすこつうたていさとき心
 ちするよのさまなりをかしうもあはれにもやうか
 へて心とまりぬへきありさまをいとむもれすくよか
 にてなにはえなきをそくちおしうおほすから
 うしてあげぬるけしきなればかうし手つから
 あげ給てまへの前裁のゆきをみ給ふふみ
 あけたるあともなくはるゝとあれわたりていみ
 しうさひしけなるにふりいてゝゆかんとともあはれ
 にてをかしきほとのもそらも見給へつきせぬ御心
 のへたてこそわりなけれとらみ聞え給ふまた

21
ウ21
オ

ほのくられと雪のひかりにいとゞきよらにわかう
 見え給ふをおひ人とも糸みさかえて見たてまつる
 はや出させ給へあちきなし心うつくしきこそな
 とをしへ聞ゆればさすがに聞ゆる事をえいなひ
 給はぬ御こゝろにてとかうひきつくるひてみさり
 出給へり見ぬやうにてとのかたをなかめ給へれとしり
 めはたゞならずいかにそうちとけまさりのいさゞか

22才

もあらはうれしからんとおほすもあなかななる
 御心なりやまつるたけのたかうおせなかにみえ給
 にされはよとむねつふれぬうちつきてあなかな
 わと見ゆる物は御はなゞりけりふとめとまる
 普賢ほさちののり物とおほゆあさましうたかう
 のひらかにさきのかたすこしたりていろつきたる
 ほとこのほかにうたてありいろは雪はつかしく
 しろうてさをにひたいつきこよなうはれたるに
 なをしもかちなるおもやうはおほかたおとろくしう
 なかきなるへしやせ給へる事いとほしけにさら

22才

ほひてかたのほとなといたけなるまできぬのうへ
 たにみゆなにゞのこりなう見あらはしつらんとお
 もふ物からめつらしきさまのしたればさすがに打
 見やられたまふかしらつきかみのかゞりはしも
 うつくしけにめてたしとおもひ聞ゆる人々にもお
 さゞをとるましうちきのすそにたまりてひ
 かれたるほと一尺はかりあまりたらんとみゆき給
 へる物ともをさへいひたつるも物いひさかなきやう
 なれとむかし物がたりにも人のさうそくをこそは
 まついひためれゆるし色のわりなうそはしらみ

23才

したる一かさねなこりなうくるきうちきかさねて
 うはきにはふるきのかはきぬいときよらにかうは
 しきをき給へりこたいのゆへつきたる御さうそく
 なれとなをわかやかなる女の御よそひにはにけなう
 おとろくしき事いともてはやされたりされとけ
 にこのかはなうてはたさむからましとみゆる御か

ほさまなるを心くるしと見たまふなにごともい
はれ給はずわれさへくちとちたる心ちし給へと
れのしゝまも心みんととかう聞え給ふにいたう
はちらひてくちおほひし給へるさへひなひふる

23
ウ

めかしうことくしうきしき官のねりいてたる
ひちもちおほえてさすかに糸み給へるけしき
はしたなうすゝろひたりいとおしくあはれにていと
といそきいて給たのもしき人なき御ありさまを
見そめたる人にはうとからすおもひむつひ給はん
こそほいある心ちすへけれゆるしなき御けし
きなれはつらうなごことつけて

あさ日さす軒のたるひはとけなからな
とかつらゝのむすほゝるらんとのたまへとたゝ
むゝとうずわらひていとくちをもけなるもいとお

24
オ

しければ出給ぬ御車よせたる中門のいたうゆ
かみよろほひてよめにこそしるきなからもよろ

つかくろへたる事おほかりけいとあはれにひさし
くあれまとへるに松の雪のみあたゝかけにふ
りつめる山さとの心ちして物あはれなるをか
人々のいひしむくらのかとはかうやうなる所なりけん
かしげに心くるしくらうたけならん人をこゝに
すへてうしるめたうこひしとおもはゝや有まし
き物おもひはそれにまきれなんかしと思ふやう
なるすみかにあはぬ御ありさまはとるへきかたな
しとおもひなからわれならぬ人はまして見しのひ
てんやわかかうみなれるはこみこのうしるめたし
とたくへをき給けんたましゐのしるへなめりと
そおほさるゝたちはなの木のうつもれたる御隨身
めしてはらはせ給うらやみかほに松の木のをのれ
おれかへりてさごこほるゝ雪も名にたつすゑのと
見ゆるなとをいとふかゝらすともなたらかなるほどに
あひしらはん人もかなと見たまふ御車いつへきか
とはまたあけさりければかきのあつかりたつね

24
ウ

出たれはおきなのいといみしきそいてきたるむす

25才

めにやむまこにやはしたなるおほきさの女のきぬ
はゆきにあひてすゝけまとひさむしとおもへるけ
しきふかうてあやしき物に火をたゝほのかにい
れて袖くゝみにもたりおきなかとをえあけやら
ねはよりてひきたすくるとかたくなゝり御ともの
人よりてそあけつる

ふりにけるかしらの雪をみる人もをとら

すぬらすあさの袖がなわかきものはかたちかくれすと
うちすし給てはなの色にいてゝいとさむしとみえ
つる御おもかけふとおもひ出られてほゝ系まれた

25才

まふ頭中将にこれをみせたらん時いかなる事を
よそへいはんつねにうかゝひくれはいま見つけられ
なんとすへなうおほすよのつねなるほどのことなる
事なざならはおもひすてゝもやみぬへきをさた
かに見給てのちは中々あはれにいみしくてまめ

やかなる御さまにつねにをとつれ給ふふるきのかは

ならぬきぬあやわたなとおひ人ともものきるへき物
のたくひかのおきなのためまてかみしもおほしや
りてたてまつり給ふかやつのまめやかこともはつ
かしけならぬを心やすくさるかたのうしろみにて

26才

はくゝまんとおほゝしとりてさまことにさなら
ぬうちとけわさもし給けりかのうつせみのうち
とけたりしよひのそめにはいとわるかりし
かたちさまなれともてなしにかくされてくちおし
うはあらざりきかしをとるへき人なりやはけにし
なにもよらぬわさなりけり心はせのなたらかにねた
けなりしをまけてやみにしかなと物のおりこと
にはおほしいつとしもくれぬ内のとのぬところ
おはしますに大輔の命婦まいれり御けつりく
しなどにはけさうたつすちなう心やすき物

26才

のさすかにのたまひたはふれなとしてつかひなら

し給へれはめしなき時もきこゆへき事ある

おりはまつのほりけりあやしきことの侍を聞え

させざらんもひかくしう思給へわつらひてと

ほゝゑみて聞えやらぬをなにさまのことぞ我

にはつゝむ事あらしとなんおもふとのたまへは身

つからのうれへはかしこくともまつこそはこれはき

こえさせにくゝなんといたつことこめたれはれい

のえんなるとにくみ給ふかのみやより侍る御文

とてとり出たりましてこれはとりかくすへき事

かはとてとり給ふもむねつふるみちのくにかみの

あつこえたるにほひはかりはぶかうしめたまへり

いとよつかきおほせたりうたも

から衣きみかこゝろのつらければたもとはか

くこそほちつゝのみ心えすうちかたぶき給へるに

つゝみにころもはこのをもちかにこたいなるうちをき

てをしいてたりこれをいかてかはかたはらいたく思

給へざらんされとついたちの御よそひとてわざと侍

27才

めるをはしたなうえかへし侍らすひとりひき

こめ侍らんも人の御心たかひ侍へければ御らんせ

させてこそはと聞ゆればひきこめられなんはか

らかりなましそてまきほさん人もなき身に

いとうれしき心さしにこそはとの給ひてことに

物いはれ給はすさてもあさましのくちつきやこ

れこそはてつからの御ことのかきりなめれ侍従こそ

はとりなをすへかめれまたふてのしりとるはか

せそなかるへきといふかひなくおほす心をつく

してよみて給へらんほとをおほすにいともかし

こきかたとはこれをもいふへかりけりとほゝゑみ

て見給ふを命婦おもてあかみてみたてまつる

28才

いまやう色のえゆるすましくつやなうふるめき

たるなをしのうらうへひとしうこまやかなるい

となをくしうつまくそみえたりあさましとおほ

すにこのふみをひろげなからはしにてならひす

27才

さひたまふをそはめに見れば

なつかしき色ともなしになにこの末つむ

はなを袖にふれけん色こき花とみしかともな

とかきけかし給ふはなのとかめを猶あるやつあ

らんとおもひあはするありくの月かけなとを

いとほしき物からをかしうおもひなりぬ

くれなゐのひとはなごるもうすくともひ

たすらくたすなをしたてすは心くるしのよやと

たうなれてひとりこつをよきにはあらねとかう

やうのかいにてたにあらましかはとかへすくく

ちおし人のほどの心くるしきに名のくちなんは

さすかなり人々まいればとりかくさんやかゝるわざ

は人のする物にやあらんとつちうめき給なに

御らんせさせつらんわれさへ心なきやうにといと

はつかしくてやをらおりぬ又の曰うへにさぶらへは

たいはん所にさしのそきたまひてくはやきのふの

28ウ

29オ

かへり事あやく心はみすくさるゝはとてなけ

給へり女房たちな事ならんとゆかしかるたゝ

むめの花のいろのことみかさの山のをとめをは

すてゝとうたひすさひて出給ぬるを命婦は

いとをかしとおもふ心しらぬ人々はなぞ御ひとり

象みいととかめあへりあらずさむきしもあさに

かいねりこのめるはなの色あひや見えつらん御

つゝしりうたのいとおかしきといへはあながちなる

御事かなこの中にはほへるはなもなかもり

左近命婦ひこのうねめやましらひつらんな

と心もえすいひしろぶ御かへりたてまつりたれば

宮には女はらつとひて見めてけり

あはぬよをへたつる中のころもてにかさ

ねていと見もしみよとやしるきかみにすて

かい給つるしもそ中をかしけなりつこもり

の日ゆふつかたかの御ころもはこに御れうとて

人のたてまつれる御そひとくえひそめのをり

29ウ

物の御そ又やまぶきかなにそいろく見えて
命婦そたてまつりたりありし色あひをわろ
しとや見給ふるとおもひしらるれとかれはた

くれなるのをもくしかりしをやさりともきえしと

ねひ人ともはさたむる御うたもこれよりのはこ
はり聞えてしたくかにこそあれ御返はたをかし
きかたにこそなとくちくにいふひめ君もおほろ
けならてしいて給へるわざなれば物にかきつけ
てをき給へりけりついたちのほとすきてことし
おとこたうかあるへければれいのところくあそ
ひのくしり給に物さはかしけれとさひしき所の
あはれにおほしやらるれはなぬかの日のせち氣
はてく夜にいりて御前よりまかて給けるを御

とのぬ所にやかてとまり給ひぬるやうにて夜ふか
しておはしたりれいのありさまよりはけはひうち
そよめきよついたり君もすこしたをやし給へる

30才

30才

けしきもてつけ給へりいかにそあらためてあらた
めてひきかへたらんときとそおほしつくけらるく日
さしいつるほとにやすらひなして出給ふひんかし
のつまとをしあけたればむかひたるらうのうへ
もなくあはれたれば日のあしほとなくさし入て
雪すこしふりたるひかりにいとけさやかに見れ
らる御なをしなとたてまつるを見いたしてすこし
さしいてくかたはらふし給へるかしらつきこほれい
てたるほとめてたしおひなをりを見てたらん時
とおほされてかうしひきあげ給へりいとおしかりし
物こりにあけもはて給はてけうそくをし
よせてうちかけて御ひくきのしとけなきをつく
ろひたまふわりなうふるめいたるきやうたいのか
らくしけかくけのはこなととりいてたりさすか
におとこの御くさへほのくあるをされておかし
と見たまふ女の御さうそくけふはよつきたり
と見ゆるはありしはこの心はえをさなからな

31才

りけりさもおほしよらすけつあるもんつきて
 するきうはきはかりそあやしとおほしけるこ
 としたにこゑすこしきかせ給へかしまたるゝ物
 はさしをかれて御けしきのあらたまらんなんゆか
 しきとの給へはさへつる春はとからうしてわ
 なゝかし出たりさりやとしへぬるしるしよとつち
 わらひ給て夢かとそ見るこつちすして出給を
 見をくりてふし給へりくちおほひのそはめより
 なをかのすゑつむはないとにほひやかにさし出たり
 見くるしのわさやとおほさる二条院におはしたれば
 むらさきの君いともつつくしきかたをひにてくれ
 なるはかうなつかしきもありけりと見ゆるにむもん
 のさくらのほそなかなよゝかにきなしてなに心も
 なくてものし給ふさまいみしうらつたしこたい
 のおは君の御なごりにてはくるめもまたしかり
 けるをひきつくるはせ給へればまゆのけさや

31
ウ32
オ

かに成たるもうつくしうきよらなり心からなとかう
 うき世を見あつかふらんかく心くるしきものをも
 みてゐたらてとおほしつゝれいのもるともにひい
 なあそひし給ひ氣なとかきているとり給よる
 つにをかしうすさひちらし給けりわれもかきそ
 へたまふかみいとなかき女をかき給てはなにへに
 をつけて見給ふにかたにかきても見まつきさま
 したりわか御かけのきやつたいにつづれるかいと
 きよらなるをみ給て手つからこのあかはなを
 かきつけにほはして見給ふにかくよきかほたに
 さてましれらんは見くるしかるへかりけりひめ君
 見ていみしくわらひ給ふまるかかくかたわに成なん
 ときいかならんとの給へはうたてこそあらめとて
 さもやしみつかんとあやつくおもひ給へりそらの
 こひをしてさらにこそしるまねよつなきすさひ
 わざなりやうちにかにの給はんとすらんといとまめ

32
ウ33
オ

やかにのたまぶをいとおしとおほしてよりの

こひ給へはへいちうかやうに色とりそへたまふな

あかゝらんはあえなんとたはふれ給ふさまいとをかし

きいもせと見え給へり日のいとらゝかなるに

いつしかとがすみわたれる木す糸ともの心もとな

き中にもむめはけしきはみほゝ糸み渡れる

とりわきてみゆはしかくしのもとのこうはいい

ととくさく花にて色つきにけり

33
ウ

くれなゐのはなそあやなくうとまるゝ

むめのたちえはなつかしけれといてやとあいな

くうちうめかれ給ふかゝる人々のす糸くいか

なりけむ

34
オ

(花のえん)

きざらきの廿日あまり南殿の桜の宴せさ

せ給后春宮の御つほね左右にしてま

うのほり給こきてんの女御中宮のかくておは
するをおりふしことにやすからすおほせと

物見にはえすくし給はてまいり給日いとよく

はれて空のけしき鳥の声も心ちよけな

るにみこたちかむたちめより始めてその道のは

みなたんいん給て文つくり給ふ宰相の

中将春といふもし給れりとの給声さへれ

いの人にことなりつきに頭中将人のめうつしも

たゝならずおほゆへかめれといとめやすくもてし

つめてこはつかひなとものくしくすくれたり

さての人々はみなおくしかちにはなしるめるお

ほかり地下の人はまして御門春宮の御さえ

1才

かしこくすくれておはしますかゝるかたにや

むことなき人おほくものし給比なるにはつかしくて

はるくともりなき庭に立出る程はしたなく

てやすきことなれとくるしけ也年おいたる

はかせとものなりあやくやつれてれないなれ

たるもあはれにさまく御覧するなんおかし

かりけるかくともなとはさらにもいはすわたのへさ

せ給へりやうく入日になるほと春の鶯さへ

つるといふまひいとおもしろく見ゆるに源氏

の御紅葉の賀の・おりおほし出られて春宮

かさし給はせてせちにせめのたまはするにのこ

れかたくて立てのとかに袖返す所をひとお

れけしきはかり舞給へるにゝるへきもの

なく見ゆ左のおとゝうらめしさも忘れて涙

落し給頭中将いつらをそしとあれば柳

花苑といふまひをこれはいますこしすこし

1ウ

2才

てかゝることもやと心つかひやしけんいとおも
 しろければ御そ給てめつらしきことに人思へり
 かんたちめみなみたれてまひ給へと夜にいりて
 はことにけちめも見えず文なとかうするにも
 源氏の君の御をはかうしもえやらす句ことに

すしのゝしるはかせともの心にもいみしう思へり
 かうやうのおりにもまつ此君をひかりにし給へれば
 御門もいかてかをろかにおほされん中宮御めの

とまるにつけて春宮の女御のあなかちにゝ
 くみ給ふらんもあやしうわかゝうおもふも心

うしとそみつからおほしかへされける

大かたに花のすかたを見ましかは露も心の
 をかれましやは御心のうちなりけんこといかてもり
 けん夜いたうふけてことはてけるかんたちめを
 のをのあかれ春宮かへらせ給ぬればのとや
 かななりぬるは月はいとあかうさし出ておかしき
 を源氏の君多い心ちに見すくしかたかくおほえ

2ウ

給ければうへの人ゝもうちやすみてかやうに
 思ひかけぬほにもしさりぬへきひまもやある
 と藤つほわたりをわりなうしのひてうかゝひあ

りけとかたらふへき戸もさしてければうちなけ

きてなをあらしに弘徽殿のほそとのに立より給へ

れは三のくちあきたり女御はうへの御つほね

にやかてまつほり給にければ人すくなゝるけ

はひなりおくのくるゝともあきて人をともせず

かやうにて世中のあやまちはするそかしと

思ひてやをらのほりてのそき給ふ人はみなね

たるへしいとわかうおかしけなる声のなへて

の人とは聞えぬおほる月夜にゝる物そなき

とうちすしてこなたさまにはくるものかい

とうれしくてふと袖をとらへ給女をそろし

と思へるけしきにてあなむくつけこはたそ

との給へとなにかうとましきとて

ふかき夜のあはれをしるも人月のおほ

ろけならぬ契りとそおもふとてやをらいたき

おろして戸はをしたてつあさましきにあき

れたるさまいとなつかしうおかしけわななくく

こゝに人との給へとまろはみな人にゆるされた

れはめしよせたりともなうてうことがあらんた

しのひてこそとの給声に此君也けり

きゝさためていさゝかなくさめけりわひしと

思へる物からなさけなくこはくしうは見え

しと思へりゑい心ちやれいならさりけんゆ

るさんことはくちおしきに女もわかうたをや

きてつよき心もしらぬなるへしらうたしと

見給に程なく明行は心あはたし女はまして

さまくしに思ひみたれたるけしき也なをな

のりし給へいかてかきこゆへきかうてやみな

むとはさりともおほされしとの給へは

うき身世にやかてきえなは尋ても草の

4
才

原をはとはしとやおもふといふさまえんにな

まめきたりことはりや聞^えしたかへたるもしかな

とて

いつれそと露のやとりをわかんまにこそゝ

か原に風もこそふけわつらはしくおほすことな

らすはなにかつゝまんもしすかひ給かとも

えいひあへす人くおきさはきつへの御つほね

にまいりちかふけしきともしけくまよへはいと

わりなくて扇はかりをしるしにとりかへて出

給ぬきりつほには人くおほくさふらひてお

とろきたるもあれはかゝるをさまたゆみな

き御しのひありきかなとつきしろひつゝ空ね

をそしあへるいり給てふし給へれとねられ

すおかしかりつる人のさまかな女御の御をとう

とたちにこそはあらめまた世になれぬは五六の

君ならんかしそちの宮の北のかた頭中將の

5
才

4
ウ

すさめぬ四君なとこそよしときゝしか中くそ
 れならましかはいますこしおかしからまし六は
 春宮にたてまつらんと心さし給へるをい
 とおしうもあるへいかなわつらはしう尋んほとも

5ウ

まきはらひさてたえなんとは思はぬけしき也
 つるをいかなればことかよはずへきさまをゝしへす
 なりぬならんたとよろつにおもふも心のとまるなる
 へしかうやうなるにつけてもまつかのわたりのあり
 さまのこよなうおくまりたるはやとありかたう
 思ひくらへられ給その日は後えんのことありて
 まきれくらし給つさうのことつかうまつり給
 きのぶのことよりもなまめかしうおもしろし藤
 つほは暁にまつほり給にけりかの有明
 出やしぬらんと心も空にて思いたらぬくま

6オ

なきよしきよ惟光をつけてうかゝはせ給ければ
 御まへよりまかて給けるほどにたゝいま北のちん⁵

よりかねてよりかくれたちて侍つる車と
 もまかりいつる御かたくのさと人侍りつる
 なかに四位少将右中弁なといそき出てをく
 りし侍つるや弘徽殿の御あかれならんと
 見給へつるけしうはあらぬけはひともしる
 くて車みつばかり侍りつと聞ゆるにも

6ウ

むねうちつぶれ給いかにしていつれとしらん
 ちゝおとゝなときゝてことくしつもてなさ
 むもいかにそや又人のありさまよく見さためぬほと
 はわつらはしかるへしきりとてはしらてあらん
 はないとくちおしかるへければいかにせましと
 おほしわつらひてつくくとなかめ臥給へり
 ひめ君いかにつれくならん日比になれはくして
 やあらんとらうたくおほしやるかのしるしの願は
 さくら。三重がさねにてこきかたにかずめる月
 をかきて水にうつしたる心はへめなれたれと
 ゆへなつかしうもてならしたり草の原をば

といひしさまのみ心にかゝり給へは

世にしらぬ心ちこそすれ有明の月の行象を

空にまかへてとかきつけ給てをき給へり

おほい殿にもひさしうなりにけるとおほせと

わか君も心くるしければこしらへんとおほして

二条院へおはしぬ見るまゝにいとつつくしけに

おひなりてあいきやつつきらうくしき心はへ

いとことなりあかぬ所なつわか御心のまゝにを

しへなさんとおほすにかなひぬへしおとこ

の御をしへなれはすこし人なれたることやまし

らんと思こそうしるめたけれ日比の御物か

たり御ことなとをしへ暮して出給ふをれ

いのとくちおしうおほせといまはいとよつなら

はざれてわりなくはしたひまつはさすおほ

いとのはれいのふともたいめんし給はすつれく

とよまつおほしめくらざれてさうの御ことま

7才

くりてやはらかにぬる夜はなくてとうたひ

給ふおとゝわたり給て一日のけつありしこ

ときこえ給こゝらのよはひにてめいわう

の御代四たいをなん見侍りぬれこの

たひのやうに文ともきやうさくにまひかくも

のゝ音ともとのほりてよはひのふるることなん

はへらさりつるみちくゝの物の上手ともお

ほかるころほひくはしうしろしめしとのへさ

せ給へるけもおきなもほどくまひ出ぬへき

心ちなんし侍しと聞え給へはことにととのへお

こなふ事も侍らすたゝおほやけことにそしうな

る物のしともをこゝかしこに尋て侍し也よ

ろつ事よりは柳花苑まことにこつたい

のれいともなりぬへく見給へしにましてさか

も春に立出させ給へらましかは世のめん

ほくめや侍らましと聞え給弁中将なとまいり

8才

7才

8才

あひてかうらんにせなかをしつゝとりくゝに物の
音ともしらへあはせてあそひ給ふいとおもしるし・

かの有明の君ははかなかりし夢をおほし出
ていと物なけかしうなめ給春宮には卯月

はかりとおほしたためたれはいとわりなつお

ほしみたれたるをおとこも尋給はんにあと

はかなくはあらねといつれともしらてことに

ゆるし給はぬあたりにかゝつらはんも人わろく思

ひわつらひ給にやよひの廿よ日右大殿のゆみ

のけちにかむたちめみこたちおほくつとへ給

てやかて藤のえんし給花さかりはずきに

たるをほかのちりなんとやをしへられたりけん

をくれてさく桜ふた木そいとおもしろきあ

たらしうつくり給へる殿を宮たちの御も

きの日みがきしつらはれたりはな〜ととも

のし給殿のやつにて何事もいまめかしうも

てなし給へり源氏の君にも一日内にて御

9才

たいめんのついでに聞え給しかとおはせねは
くちおしつものゝはえなしとおほして

御この四位少将をたてまつり給ふ

わかやとの花しなへての色ならはなにか

はさらに君をまたまし内におはするほどにて

うへにさうし給したりかほ也やとわらはせ

給ふてわざとあめるをはやうものせよかし女

みこたちなともおひいつる所なればなへての

さまにはおもふましきをなどの給はず御

よそひなとひきつくるひ給ていたづくるゝ

程にまたれてそわたり給桜のからのきの

御なをしゑひ染のしたかさねしりいとなかく

ひきてみな人はうへのきぬなるにあされたる

大君すかたのなまめきたるにていつつかれいり

給へる御さまけにいとこと也花の匂ひもけ

をされて中〜ことさましになんあそひなと

9才

10才

いとおもしろうし給て夜すこしふけ行ほと
 に源氏の君いたうゑいなやめるさまにもて
 なし給てまぎれたち給ぬしん殿に女一宮
 女三宮のおはしますひんかしの戸くちに
 おはしてよりぬ給へりふちはこなたのつ
 まにあたりてあれはみかうしともあけわたし

10ウ

て人々いてゐたり袖くちなとたうかのおりお
 ほえてことざらめきもて出たるをふさはし
 からすとまつ藤つほわたりをおほし出らるな
 やましきにいといたうしゐられてわひにて侍り
 かしこけれと此おまへにこそはかけにもかくさせ
 給はめとて妻戸のみすをひきゝ給へはあな
 わつらはしよからぬ人こそやむことなきゆかりは
 かこち侍なれといふけしきを見給におもく
 しつはあらねとをしなへてのわかうとゝもに
 はあらずあてにおかしきけはひしるし

11オ

そらたき物いとけうたうくゆりてきぬの
 をとなひいとはなやかにふるまひなして心
 にくくおくまりたるけはひはたちをくれい
 まめかしき事をこのみたるわたりにてや
 むことなき御かたく物見給とて此戸くちは
 しめ給へるなるへしさしもあるましき事

なれとさすかにおかしうおもほされていつれ
 ならむとむねうちつふれて扇をこられてか
 らきめを見るところおほとけたる声に

いひなしてよりぬ給へりあやしくもさまかへ

11ウ

けるこまうとかなといらふるは心しらぬにや
 あらんいらへはせて 時くうちなけくけはひ
 するかたによりかゝりて木丁こしに手をとら
 へて

あつさ引いるさの山にまとぶかなほの見し
 月の影や見ゆるとなゆへかとをしあてに
 の給ふをえしのはぬなるへし

心いるかたならませは弓はりの月なき空
にまよはまじやはといふ声たゞそれなり
いとうれしきものから

注

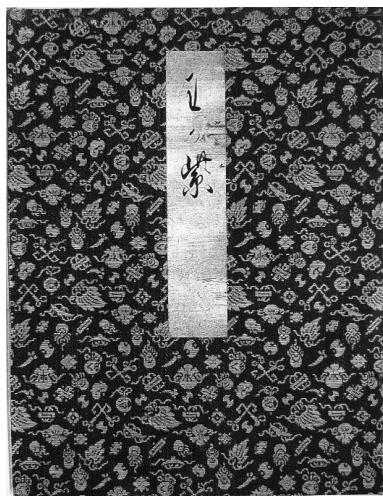
- (1) 「長谷川端蔵『源氏物語』源氏物語筆者目録 源氏物語秘訣」、『文学部紀要』第四七卷二号(中京大学文学部 平成二五年三月)
- (2) 「長谷川端蔵『源氏物語』昌琢筆 桐壺」、『文学部紀要』第四八卷一号(中京大学文学部 平成二五年一〇月)
- (3) 「長谷川端蔵『源氏物語』玄陳筆 帚木」、『文学部紀要』第四八卷二号(中京大学文学部 平成二六年三月)
- (4) 「長谷川端蔵『源氏物語』玄的筆 空蟬 岡本主水筆 夕顔」、『文学部紀要』第四九卷一号(中京大学文学部 平成二六年一〇月)
- (5) 注4に同。
- (6) 「長谷川端蔵『源氏物語』西山宗因筆 紅葉賀」、『文学部紀要』第四六卷二号(中京大学文学部 平成二四年三月)
- (7) 「長谷川端蔵『源氏物語』西山宗因筆 宿木」、『文学部紀要』第四七卷一号(中京大学文学部 平成二四年一〇月)
- (8) 「石井三家系図」再稿(貴重資料画像 京都大学電子図書館)。中嶋謙昌氏「『石井三家系図』の成立 連歌師石井家と東九条荘下司職石井氏」、『京都大学国文学論叢』(平成二六年九月)。
- 石井家については、仙台市史編纂委員会編『仙台市史』五・別編三(仙台市役所 昭和二六年二月)、宮城県史編纂委員会編『宮城県史』一四(財団法人宮城県史刊行会 昭和三三年一月)も等も参考とした。
- 廣木一人氏編『連歌辞典』(東京堂出版 平成二二年三月)「石井家」に、
- 連歌師の家、出自は、室町期以降に九条家家司を務めた石井三家であるとみられる。初代の了派(滋久)は宗祇門とされ、『新撰菟玖波集』に「よみ人しらす」として一句入集しており、実隆とも交流があった。近世期以降は、猪苗代家とともに仙台藩に仕え、同家と隔年で七種連歌に出座した。猪苗代家とほぼ二年交代で京都に住み、公家と伊達家との連絡係を務めた。なお、近世中期の連歌師了珍の実父は里村家の昌築である。家系は、その後近代まで存続した。

という解説もある。

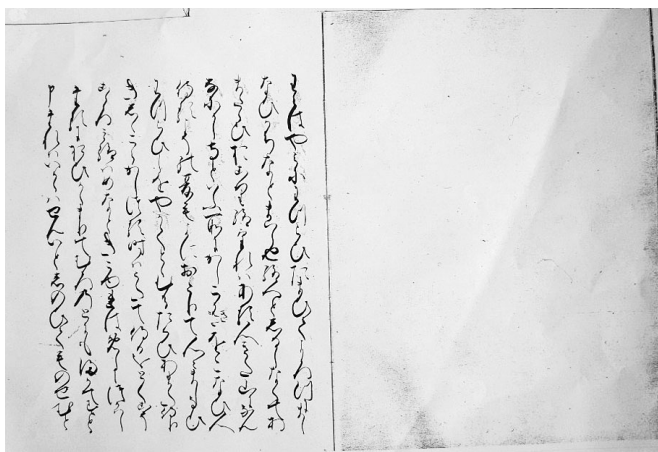
- (9) 『石井三家系図』再稿の了派に「連歌家業」とある。
- (10) 正宗敦夫氏編纂『顯伝明名録』下(日本古典全集刊行会 昭和十三年二月)
- (11) 連歌総目録編纂会編『連歌総目録』(明治書院 平成九年四月)
- (12) 菊田定郷氏『仙台人名大辞書』(仙台人名大辞書刊行会 昭和八年二月)。家臣人名事典編集委員会編『三百藩家臣人名事典』第一卷(新人物往来社 昭和六年二月)「石井了瑄」にも同様の記述がある。
- (13) 注8の『宮城県史』に同じ。
- (14) 『伊達世臣家譜』卷六「着座之部」(仙台叢書刊行会編『仙台叢書』続刊第三卷 東北活版社 昭和十二年三月)に、「猪苗代家」の記載がある。
- (15) 綿拔豊昭氏『近世前期 猪苗代家の研究』(新典社 平成一〇年四月)「第七章 嵐行齋兼説」
- (16) 注4に同じ。
- (17) 池田亀鑑氏編著『源氏物語大成』第一冊(中央公論社 昭和五九年一〇月)
- (18) 有川武彦氏校訂『源氏物語湖月抄』上(講談社学術文庫 昭和五七年五月)
- (19) 島津久基氏校訂『源氏物語』(岩波文庫 昭和三年八月)
- (20) 江戸期の版本としては、無跋無刊記本も「十二」である。版本については、清水婦久子氏『源氏物語版本の研究』(和泉書院 平成一五年三月)を参考。
- (21) 小井川百合子氏編『伊達政宗言行録』木村宇右衛門覚書(新人物往来社 平成九年七月)の中に写真がある。それを本文としたが、平重道氏他編『伊達治家記録』二(宝文堂 昭和四八年二月)では、「二首目「とをかりし」は「遠ク見シ」、四首目「むかしたれ」は「昔タカ」と異同がある。国書刊行会編『続々群書類従』第一四「文禄三年吉野山御会御歌」(続群書類従完成会 昭和四五年一月)も参考。

- (22) 鈴木栄一郎氏他『文武名将 伊達政宗卿詩歌要釈』（仙台扶搖会 昭和一〇年五月）
 藩祖伊達政宗公顕彰会編『伊達政宗卿伝記史料』（東北印刷株式会社 昭和一三年九月・復刻版 文献出版 昭和五三年九月）
 高橋富雄氏他『シンポジウム 伊達政宗』（新人物往来社 昭和六二年九月）「総論伊達政宗」「歌人・伊達政宗」（共に高橋富雄氏）
 (23) 注22に同じ。
 (24) 平重道氏他編『伊達治家記録』四（宝文堂 昭和四九年六月）
 (25) 綿拔豊昭氏・岡本聡氏編『伊達政宗公集』（古典文庫 平成一〇年二月）
 (26) 注25に同じ。
 (27) 注25に同じ。
 (28) 鈴木省三氏編『仙台叢書』第一卷（仙台叢書刊行会 大正一一年一月・復刻版 宝文堂 昭和四六年八月）注22『伊達政宗卿伝記史料』や注25の『伊達政宗公集』にも収録。
 (29) 注22の『伊達政宗卿伝記史料』に記載がある。
 (30) 仙台市博物館編『図説伊達政宗』（河出書房新社 昭和六一年一月）
 伊達宗弘氏『武将歌人伊達政宗』（ぎょうせい 平成一三年二月）
 (31) 注22に同じ。
 (32) 宮城県史編纂委員会編『宮城県史』二（財団法人宮城県史刊行会 昭和四一年三月）
 小林清治氏『伊達政宗』（人物叢書 吉川弘文館 昭和三四年七月）
 高橋富雄氏編『伊達政宗のすべて』（新人物往来社 昭和五九年七月）
 小林清治氏他編『伊達政宗 文化とその遺産』（里文出版 昭和六二年九月）金沢規雄氏『伊達政宗の文人的境涯』

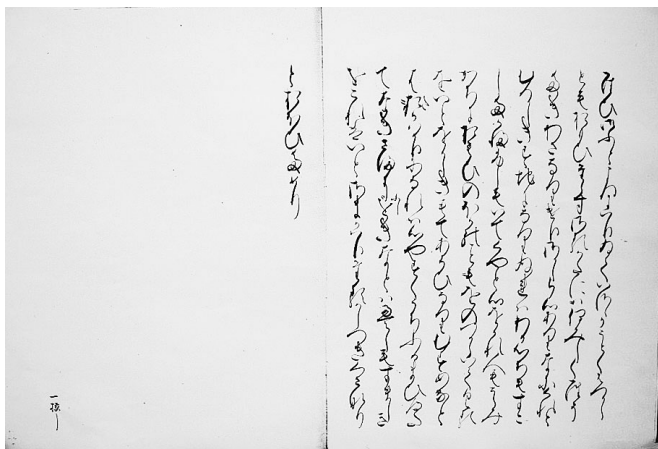
- 綿抜豊昭氏『戦国武将と連歌師』（平凡社新書 平成二六年一月）
- (33) 注8の『宮城県史』一四に「伊達家連歌目録」がある。
- (34) 注8の『宮城県史』一四に同じ。
- (35) 注22の『伊達政宗卿伝史料』に記載がある。
- (36) 福井久蔵氏『連歌の史的研究』（有精堂 昭和四四年一月）。
- 奥田勲氏『連歌師 その行動と文字』（評論社 昭和五二年六月）。
- 綿抜豊昭氏『連歌とは何か』（講談社選書メチエ 平成一八年一〇月）『連歌その後』、同氏『戦国武将の歌』（笠間書院 平成二三年三月）『戦国武将の歌概観』等を参考。
- (37) 小和田哲男氏『戦国大名と読書』（柏書房 平成二六年二月）『武将たちはなぜ王朝古典文学を読んだのか』
- (38) 『八代城主・加藤正方の遺産』（八代市立博物館未来の森ミュージアム 平成二四年一〇月）に、本書を納める葵の紋が入った外箱の写真等がある。



若紫卷 表紙



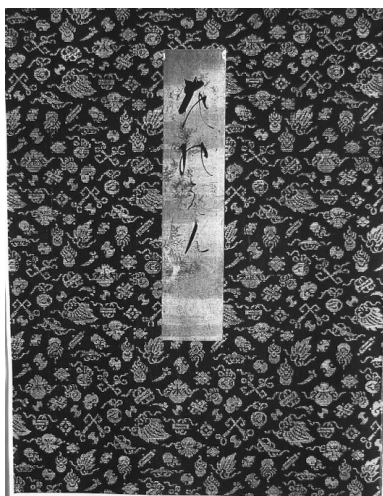
若紫卷 1才



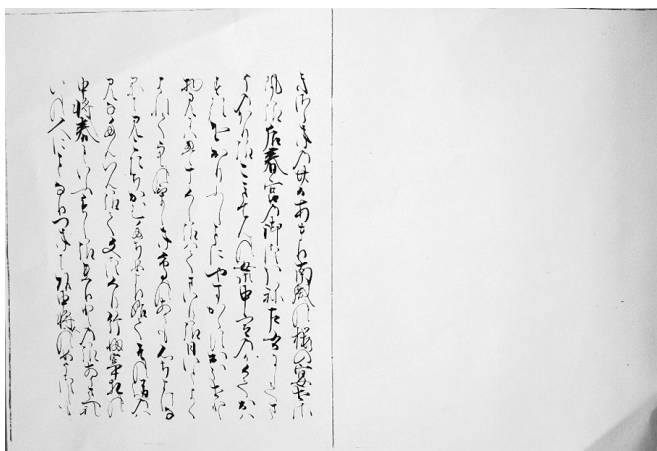
若紫卷 終丁



末摘花巻 表紙



花宴巻 表紙



花宴巻 1才

